



ロケットパンティナイト

自称 シルマン

目次

第1話『自由な乳首』	1
第2話『バイブスター』	15
第3話『あびるのジョー』	26
第4話『異種格闘技戦』前編	35
第5話『異種格闘技戦』後編	45
第6話『ユルコと米ナス』	57
第7話『Xデー』	65
第8話『桜田門』	71
第9話『再会』	77
最終話『変態の母』	83

第1話 『自由な乳首』

変態の終着駅と呼ばれる街『大塚』

一般人は寄りつかないような風俗街。

コアな変態たちが欲望の捌け口を求め、夜な夜なゾンビのように彷徨っていた。

そんな風俗街の片隅で、チカチカと消えそうに灯る電飾看板が見えた。

スナック『パブパブ』

ラーメン屋の居抜き物件。

カウンター席10席だけの店内は、殺風景な内装のままだった。

『パブパブ』のママ

『路地庵 波舞子(ろしあんぼぶこ)』

開店前のいつもの作業。

割烹着姿で、お通し用の干し芋を皿に盛り付けていた。

「パブ姉～

いくら変態しか来ないって言ってもさ～

もうちょっと色気出した方が良くない？」

『パブパブ』のチーママ

『志茂廻 緩子(しもまわりゆるこ)』

客側のカウンター席に座り、飲み放題用の鏡月の空のボトルに、安い焼酎を移し替えながら言った。

「またそんなこと言ってユルコは。

いいわ、お金渡すから買ってきてよ色気」

「だーかーらー

色気は売りもんじゃないって。
何て言うのかな～？
体の内側から溢れ出てくるエナジードリンクのパワースポットのような…」

「おだまり」

色気を語り始めたユルコに対して釘を刺す女が現れた。

「T シャツ短パン姿で接客するようなアナタに色気を語る資格はありません！」

『パブパブ』の新人ホステス
『礼党真宮子(れいとうまぐこ)』

黒縁メガネにリクルートスーツ。
孔雀の羽が後頭部からバサバサとなびいていた。

「出た、生意気な新人！
何なの？ そのうっとおしい後ろの羽」

「色気です」

「お前が黙れ」

ユルコは真宮子の背中に手を回し、貼り付けてあった孔雀の羽をブチブチと抜きまくった。

「キャーやめてー
色気無くなっちゃうー！」

真宮子は、わめきながらポケットから予備の孔雀の羽を取り出してユルコに手渡した。

「はい、ユルコの分」

「ありがとう」

思わず受け取ってしまったユルコは孔雀の羽を床に叩きつけた。

「いるかーボケー！」

パンパン！

パブ姉は両手を叩いた。

「ったく、じゃれてんじゃないわよ。
もうすぐ開店よ。
て、あれ？ 今日何曜日だっけ？」

「水曜日です」

真宮子は黒縁メガネをスッと上げて言った。

「あらやだ、始まっちゃう！」

パブ姉はバタバタと慌てて店の奥に引っ込んで、店内のスピーカーからラジオを流した。

wwwwww

「世界の爆弾をすべてパンティーに変えてしまおう！
変態が世界を救う！」

『ロケットパンティーナイト』

司会は私、
『咲穂竹 汁男 (さきほだけしるお)』
がお送りしまーす！」

wwwwww

「間に合ったー！
ほらほら、二人とも店はとりあえずいいから、このラジオ聞いて」

パブ姉はユルコと真宮子をカウンター席に座らせ、ハイボールを差し出した。
自分は瓶ビールを開けてラジオに耳を澄ませた。
ユルコと真宮子は顔を見合わせて首を傾げたが、ハイボールを口にしながらラジオを聴いた。

wwwwww

「さあ、今週もやって参りました。

『ロケットパンティーナイト』

毎回あらゆるジャンルのエキスパートをお呼びして対談形式で色んな角度から世界平和を導き出す社会派番組。

それが...

ロケットパパパパパパパパパパンティー

ナイト！」

wwwwww

「何だこいつ、

パンティー言いたいだけじゃん」

ユルコがボソッとこぼすと、パプ姉は人差し指を口元にあて「シッ」とやった。

wwwwww

「では早速、今週のエキスパートさんをご紹介します！

まずは、

『バラ色の人生はバラ色の乳首から』

をコンセプトに活躍されている現代乳首アーティスト『神の乳首を持つ女』こと

『飯尾 数子 (いいおかずこ)』さん

でーす！」

「今晚はいいの？ いいよ。

飯尾 数子です。

よろしくをお願いします」

「はい、よろしくをお願いします。

そして対談して頂く、もう人方はこの方！

100万部を超えるミリオンセラー作家

『乳首よ野生に帰れ』の著者

『松野反 甘尾 (まつのそりあまお)』さん

でーす！」

「こんばんは。

反れない時は反らなくていい。

松野反 甘尾です。

よろしくをお願いします」

「よろしくお願いまーす！

はい、今週もなかなかこだわりが強そうなエキスパートさんにお越し頂きました！

お二方は共に『乳首』をテーマにされていますが、何故そこに至ったのか経緯をお話し頂けますでしょうか？

まずは、飯尾さんから」

「はい、そうですね。

私は以前、建築業のひとつ内装補修という仕事をしていました。特殊な職種のため、扱う材料の中には有機溶剤が多くありました。

有機溶剤は決して体に良い物ではありません。

ですが補修をする工程では、どうしても使わざるを得ない現状に不満を抱えていました」

「なるほど。

特殊な技術職と言えど、扱う材料は安全な物が良いってことですね？」

「はい。子供やペットにも安全な材料ならもっと補修という職業に誇りを持てると思っていました」

「素晴らしい！

飯尾さんの補修という仕事に対する思いは伝わりました。ですが、何故そこから『乳首アート』にいったのでしょうか？」

「はい。それは人体に一切悪影響を及ぼさない天然由来の成分から精製した塗料が完成したからです」

「なるほど。

その塗料を補修には使わず、真っ先に乳首にいったのは何故でしょうか？」

「はい。安全な塗料が出来たからといって他人で試す訳にはいきません。

まずは自分から」

「乳首から？」

「はい。

補修の技術の中でタッチアップという色を差していく技術があるのですが、私はその技術を最も得意としていました。

迷いはなかったです。試した結果、あの頃の乳首よりワンランク上の乳首を手に入れることが出来たのです。

そして確信しました。

この技術があれば乳首で困っている人たちを幸せにしてあげられると」

「イツグレイツ！

補修という特殊な技術があって初めて完成した『乳首アート』という訳ですね！」

「ちょっと待ったー！」

「おっと、どうしました？ 松野反さん」

「言わせてもらいますけど、天然由来の塗料までいい。

だけど、乳首を塗りつぶしてしまったら、天然じゃないじゃないか！

その行為は乳首に対する冒涇だー！」

「なるほど。

一旦、落ち着きましょう松野反さん。

それでは改めてご紹介致します。

『乳首よ野生に帰れ』の著者

松野反 甘尾さんでーす！

まずは『乳首作家』になられた経緯をお話し下さい！」

「え、あ、

取り乱してすみません。

えーと、私は小さい頃から自然が好きで、特に山が好きだったんです。

色んな山々の写真を見ては、いつか登りたいと思っていました。

そして大人になり、気がつけば登山家になっていました」

「なるほど。

松野反さんにとって山はずっと憧れだったんですね」

「ええ。

あの事故さえなければ…」

「え！？

あの事故とは何ですか？ 松野反さん！」

wwwwww

「ハハ、

どうせへびにチンコ噛まれたとか言うじゃないの〜？」

ユルコはハイボールのグラスを傾けながら鼻で笑った。

「おだまり！」

ユルコは発想が下品なのです。

良い話なんだから黙って聞くのです！」

真宮子は姿勢を正し、ハイボールを口に含んだ。

wwwwww

「へびにチンコを囓まれたんです」

「ええー！！

へびにチンコを！？」

wwwwww

ブッ！

真宮子はハイボールを吹き出した。

「あははー！

ほら見ろ、当たったじゃん」

ユルコが勝ち誇った顔を向けると、真宮子は悔しそうに口を拭きながらおしぼりを囓んだ。

wwwwww

「想像するだけで恐ろしい事故に遭われた松野反さんですが、登山家から『乳首作家』に転向するには、かなり大胆な路線変更だったと思われませんが」

「いえ、それがそうでもないんですよ汁男さん。

確かに私はへびにチンコを囓まれた恐怖から、山登りが出来なくなってしまいました。

ですが、頂上を目指したい気持ちは変わりません。

ある夏の日、街で途方に暮れていると突然、私の目の前に山が見えたのです」

「え？

街の中で山ですか？」

「ええ、

露出の激しい女性の胸の山が二つ見えたのです」

「なるほど。

その山ですか！

ということは、当然頂上を目指したと」

「はい、気持ちは登山家のままですから。

そこからですね。色んな山に登りたいという情熱が帰ってきたのは」

「イッツグレイツ！

山への思いが強い松野反さんだったからこそ『登山家』から『登パイ家』に転向することが出来たんですねー」

「そうです。

そして私は、自然の姿が一番美しいと思っているので『乳首アート』は自然破壊にも似た行為だと強く批判します！」

「なるほど。

『乳首アート』は自然破壊。

このような意見が出ましたが、飯尾さんはどのようにお考えでしょうか？」

「フン、

何を持って自然破壊とおっしゃってるのか、わかりかねますが『乳首アート』は乳首を傷つけることはありません。

そして何度でも好きな乳首に変えられます。それはもう自然破壊どころか、色んな人生を体感出来るドラマティックなアートなのです！

それより、松野反さん。

あなたのその格好が自然だと言うのは、どうかと思いますが？」

「イッツクレイジー！

私も最初から気になっていたのですが、なぜTシャツの乳首周りだけをくり抜いているのでしょうか？ 乳首の毛もミステリーサークルのようになっていますが？」

wwwwww

「あははー！

真宮子あんたさっき松野反の話を良い話って言ったよね？

ミステリーサークル乳首男の話、まともに聞ける？」

ユルコは真宮子の頬を人差し指でツンツンと突いた。

「ウッ、

それは...

コンプレックスをあえて、さらけ出して自信を持って生きる姿は素晴らしいと思います」

「お！ 言うじゃない。

じゃあ賭けようか？

この対談どっちが勝つか。

私は『乳首アート』の飯尾さん。真宮子は当然、松野反よね。

私が勝ったら、あんたは『乳首アート』の刑。

あんたが勝ったら私のこの T シャツの乳首周り、くり抜いてもいいわ！

どうよ？ 勝負する？」

ユルコは試すように真宮子の顔を覗き見た。

「望むところです！

私が勝ったら、ユルコの乳首ごとくり抜いてやります！」

真宮子はハサミをシャキシャキと鳴らし、黒縁メガネをスッと上げた。

「そうこなくっちゃ！

言っておくけど『乳首アート』は私がやるから覚悟しな！」

そう言ってユルコは黒の油性ペンを持ち、ナイフを舐めるような仕草で挑発した。

wwwwww

「私の乳首がミステリーサークルのように見えても、これは自然の姿です。

自然の姿を恥じるということは、ありえない感情だと思っています。

ですが、現代社会では人工物の固まりの中で生きています。すると、自然が不自然に感じてしまうおかしな感情が生まれてしまうのも事実です。

その中で様々な企業が努力し、ビルの屋上に緑を植えたりしている姿に私は感動しました」

「なるほど。

それをヒントに人工物を T シャツに例えたのですか？」

「そうです。

T シャツという人工物から覗き見る自然の乳首。自然が大事と印象づけるには、乳首周りをくり抜くのが、一番の方法なのです」

「ちょっと待って下さい。

現代社会の中で緑を増やす努力が、どうして乳首をさらけ出すことに繋がるんですか？

法律上では、ただの公然わいせつ罪です。

それが現代社会です」

「なるほど。

ですが飯尾さん。

この番組『ロケットパンティーナイト』は現代社会に対して変態が世界平和を唱えていく番組です。

この場では、法律を反論題材にしないで下さい」

「え？ あ、はい、わかりました。

では、松野反さんの乳首は一旦置いときます。

先日『乳首アート』によって人生がバラ色になったという、お客様からお手紙を頂きました。

この場を借りて読ませて頂いてもよろしいでしょうか？」

「ファンタスティック！

もちろんです！

ぜひお聞かせ下さい」

「ありがとうございます。

では本名は控えさせて頂き、イニシャル Y さんからのお手紙です。

『お久しぶりです。数子先生。

以前、陥没している乳首で悩んでいた私を救って頂き、ありがとうございました。

陥没しているのに飛び出て見えるトリックアートのような『乳首アート』

大変感動しました。

お陰様で今は彼氏も出来ました。彼氏も面白がって無いはずの空中の乳首を舐めていきます。

今度は角度によって違って見える『乳首アート』をやって欲しいです。

『乳首アート』最高！』

以上、Y さんからのお手紙でした」

「イッツグレイツ！

『乳首アート』は人々の心を豊かにするんですね！」

「それは違うと思います！」

「おっと松野反さん。今の手紙の話を聞いても納得できませんか？」

「はい。『乳首アート』は結局のところ、人工物です。さらに自然の姿を隠すただの現実逃避だとも言えます。

そんなハリボテのような幸せはすぐに崩壊してしまうでしょう。

自然を隠すなんて愚かな行為です！」

「なるほど。

『乳首アート』から生まれた幸せは偽物だということですか？」

「ええ、間違いないでしょう」

「ちょっとまって下さい松野反さん！

幸せと思う感情に偽物なんてないと思います！

あなたが書いた『乳首よ野生に帰れ』を読ませてもらいましたが、全く持って女性側の意見が書かれていません。100万部売れたと言ってもオッパイ好きの男だけが買ったに過ぎません。自然を大事だと言うのであれば、女性も自然の一部です。その一部から支持を受けられないのであれば、不自然な偏った意見でしかないと思います」

「なるほど。

『乳首アート』が偽物だということであれば、『乳首よ野生に帰れ』は万人が納得する書物でなければおかしいということですね？」

「そうです！」

「ハッハッハッ

何を言ってるんですか、飯尾さん。

あなたは『神の乳首を持つ女』でしょ？

だったら見せて頂きたい。

『乳首アート』が本物か偽物かは、私のこの目で判断させていただきます。

私の乳首はすでにさらけ出していますよ」

「なるほど。

松野反さんの乳首にも見慣れてきて、違和感がなくなってきました。

『乳首アート』は偽物じゃないと判断するには、飯尾さんの乳首を見ないことには分からないということですね。

飯尾さん、
乳首を出して頂くことは可能でしょうか？」

「ダメに決まってるだろーが！」

「おっと、ここでお時間です。
今週も白熱した変態談義。
松野反さん、飯尾さん、どちらも平和に対する熱い気持ちは伝わりました。
それではここで私、汁男の独断と偏見で、この対談にジャッジをつけたいと思います...」
wwwwww

「お！ ついに来た」

いつの間にか前のめりでラジオを聞いていたユルコと真宮子。
飲み干したハイボールのグラスを置き固唾を飲んで、さらに耳を澄ませた。

wwwwww
「それではパンティージャッジ！

例えば、一般的な乳首ではない我が子がいたとします。不憫に思った親は先のことを心配し、我が子に乳首アートを施しました。
ところが、何も知らずに育った子供の乳首アートが成長の過程で取れてしまうのです。
その時初めて、本当の自分の乳首を知った我が子はショックを受けます。
あんなに褒められた乳首が偽物だったなんてと...
そうになると、何を信じて生きていけばいいのか分からなくなってしまいます。
では、自然のままが良かったのか？
それも違います。
コンプレックスを抱えたまま育ってしまうでしょう。他人と違う乳首ということでイジメにもあってしまうかも知れません。
現実を受け入れることも大事ですが、理想を求める気持ちも現実です。
本当の乳首を残しつつ、理想の乳首を手に入れることが出来る乳首アートは素晴らしい技術です。
自然のまま成長し、理想の乳首を求める感情が生まれた時、自由な選択が出来る世の中こそが、本当の自由な乳首なのではないでしょうか？

今夜もお付き合い頂きありがとうございました。
『ロケットパンティーナイト』
また来週ー！」

wwwwww

「へ？」

黒マジックとハサミを持ち、睨み合っていたユルコと真宮子は拍子抜けした顔をした。

「ちょっとパブ姉ー？

この話どっちが勝ったわけ？」

ユルコはカウンター越しに優しく微笑むパブ姉に聞いた。

「聞いたまんまよ。

変態に勝ち負けなんかないのよ」

「ウソー！？

つまんなーい。真宮子の乳首真っ黒にしてやりたかったのにー！」

「パブ姉さんは、何故私たちにこのラジオ番組を聞かせたのですか？」

真宮子はハサミを置いて真っ直ぐにパブ姉を見た。

「さすが真宮子ね。

『ロケットパンティーナイト』は本気で変態が世界を救うと考えてる素晴らしい番組よ。

そして私たちは変態の街『大塚』で変態を相手に商売をしている。世界を救うであろう変態を相手によ。

そう思ったら私たちも世界を救う手助けをしているんだっていう気がして来ない？」

「はい！

これからは、もっと変態に優しくしようと思います」

「なんだかな～

変態は所詮変態でしょ～」

「おだまり！

ユルコは感受性というものが足りないようね！」

「真宮子いいの。

感じ方は人それぞれ自由なんだから。

ただあなたたちにも、自分の仕事に誇りを持ってもらいたかったの」

「まあ、面白い番組ではあったかな...」

ユルコは照れ臭そうにポツンと言った。

「さあ！ この話はお終い！
今日も頑張りましょう！
ほら、お客さん見えたわよ」

カランコロン！

店の入口の扉の鈴が鳴った。

「いらっしゃいませー
パンティーの生地は何にしましょうかー？」

ユルコと真宮子はいつもより少しだけ楽しそうに接客をしていた...

第2話『バイブスター』

「うう～」

ユルコは残りのメダル3枚で、一か八かの三連どんちゃんを狙った。
ビタビタの目押しでストップボタンを叩いた。

「おりゃ！」

思いは届かず三連どんちゃんはスルッと滑って止まった。

「クッソ～、この糞詰まり台め！」

客もまばらな大塚駅前のパチスロ店。

ユルコはスナック『パブパブ』の出勤前にパチスロを打っていた。
連チャンしてもいいように早めに家を出て来たが、早々に有り金が底を尽きてしまい逆に時間が余ってしまった。
短パンのポケットからセブンスターを取り出し火を付けようとした。

「チッ」

ユルコは舌打ちをして空き箱を握り潰した。
仕方なく台を物色するフリをしてホールの床に落ちたメダルを探した。
すると、重そうに台車を押して歩く女の後ろ姿が見えた。スラっとしたスタイルにボーイッシュな髪型だった。
台車の上にはメダルの詰まった木箱が3箱積まれていた。1箱5千枚は入る。等価交換のこの店で現金に換算すると、ざっと30万円を押して歩いているのと同じだった。

「ウッソ！？

この店であんなに出すヤツ見たことないんだけど！」

ユルコは自然とボーイッシュ女の後ろ姿を追いかけた。

追いつくと台車のハンドルに手を掛けた。

「え？」

突然のユルコの行動に振り向いたボーイッシュ女は宝塚の男役のような端正な顔立ちだった。

一瞬ドキッとしたユルコだったが構わず台車を奪うように押した。

「そんな押し方じゃ日が暮れちまうよ。

後は私に任せな」

そう言ってユルコは台車をそのまま押して、メダルの枚数を数えるジェットカウンターまで行き、手際よく木箱のメダルを流した。

数え終わったメダルはレシートになって出てきた。

そのレシートをちぎり、ボーイッシュ宝塚女に手渡した。

「ほら」

「ありがとう。

時間潰しに初めてやったら、こんなことになってしまった」

「出たー！ ビギナーズラック！」

「で、このレシートはどうすればいいんだ？」

「ハハ、

あんた私じゃなかったら根こそぎいかれてるよ」

ユルコは呆れたように溜め息をつくど、景品カウンターまで宝塚女を案内した。

「セブンスター1カートン」

レシートを出したと同時に言ったユルコ。

チラッと振り返ったが、宝塚女は気にする様子もなく、カウンター越しの景品が飾られているガラスのショーケースに魅了されていた。

「ああー！！！」

宝塚女はガラスのショーケースの最上段を指差して叫んだ。

「ん？」

そそくさと1カートンのセブンスターを脇に抱えると、ユルコは宝塚女が指差すショーケースを見上げた。

そこにはミラーボールのように光り輝くコケシのような物が見えた。しかもそのコケシの頭は二つあった。

ユルコは目を擦り、もう一度目を凝らした。

「何だあれ？」

「さすが大塚だ。

こんな所で『ダブルドラゴン』に出会えるなんて思ってもみなかった」

「ダブルドラゴン～！？」

ユルコは光り輝くコケシの換金枚数を見た。

「うわ！ マジかよ！？」

15000枚！？ 現金にすると30万円。

光り輝くコケシが30万～！？

ユルコはいつものパチスロ店で自分の知らない世界を感じた。

「そこの君、あれはいくらで売ってるんだ？」

宝塚女は光り輝くコケシを指差し、カウンター越しの店員に聞いた。

「え？ あれは売り物ではありません。

ですが、お客様の出玉で交換出来ますか？」

「なんだって！？

よく分からないが、そうしてくれ」

「はい。かしこまりました」

店員は緊張した面持ちで白の手袋をはめた。脚立に登りガラスのショーケースから、慎重に光り輝くコケシを取り出した。

ゆっくりと宝塚女の目の前に置いた。

「素晴らしい…」

宝塚女は目を輝かせると、優しく包み込むように光り輝くコケシを抱き上げた。

「このズッシリとくる重みはオールステン証し。一本ステンレスから絶妙なウネリとウロコを彫り出した双頭の龍。

前方の龍。しなやかな反りと返しの曲線は、GスポットとPスポットを同時に攻め、返しの立髪はクリトリスを確実に捉えて刺激する。

後方の龍。前頭より複雑なウネリの曲線は、アナルに入り込んだら性感帯を探し出すリーダーのよう…」

「おいおい！

涼しい顔して何を説明してんだよ！」

取り憑かれたように語り始めた宝塚女に、たまらずユルコはツッコんだ。

「あ、ハッ！

つい感動して我を忘れてしまった…」

「何なのそれ？

ステンレス製のバイブ？」

「そう。

だが、これはただのバイブではないんだ。

この世に同じ物を二つと作らない。

バイブ彫刻家

『我武者羅(がむしゃら)』の作品さ」

「はあ？ バイブ彫刻家～？」

「そう、人間国宝だ。

そしてステンレス製のバイブは持ち手の技量が試される最も難しい素材なんだ。

私の名前は

『千忽方 殻子(ちこつかたからこ)』

バイブ業界では光速で快感に導くことから『バイブスター』と呼ばれている。

この『ダブルドラゴン』に出会えたのは君のお陰だ。お礼にどうだい？

試してみるかい？」

千忽方穀子は光り輝く『ダブルドラゴン』をユルコの顔の前にかざした。

「ちょ、ちょっと、勘弁してよ！

私は本物志向なんだよ！」

ユルコは後退りしてセブンスターを抱え直し、逃げるようにパチスロ店を立ち去った…

変態がまばらに彷徨き始める時間帯。

電飾看板がチカチカと消えそうに灯る。

スナック『パブパブ』

「ハメドリハメスギハメタマゴ

ハメドリハメスギハメタマゴ

ハメドリハメスギハメタマゴ」

真宮子は開店前に滑舌を良くする早口言葉を繰り返していた。

「偉いわね～真宮子は」

その健気な姿を見ながらパブ姉は、お通し用の干しぶどうを皿に盛っていた。

カランコロロン！

店の入口の扉の鈴が鳴った。

「おいーっす」

結局、出勤時間ギリギリになったユルコ。

いつもの感じで店に入ると、パブ姉が即座に聞いてきた。

「パチンコ屋で何した？」

「え？ 何で！？」

ドキッとしたユルコは、後ろめたさが顔に出た。

「その日暮らしのユルコが1カートンを買うなんてありえない。
現金にしたら6千円近くになる。
ユルコは6千円分の出玉があったら、現金にしてるはず。でもそれをしないで1カートンにした...
何かあったわね？」

パブ姉は盛り付けてた干しぶどうを人差し指と親指でつまみ、潰すわよと言わんばかりにユルコの前にかざして見せた。

「え、何よ？
パチンコじゃないしパチスロだし。
でも出たような出てないような...」

「ユルコ！
そんな爺さんのセックスみたいな言い訳するんじゃないよ！人を騙すようなことしたら変態の風上にも風下にも置けないよ！」

「騙してなんかないって！
助けたお礼みたいなもんだよこれは！」

「おだまり！
ウソツキユルコノアナルズキ
ウソツキユルコノアナルズキ
ウソツキユルコノアナルズキ」

真宮子は黒縁メガネをスッと上げながらユルコに詰め寄った。

「何だよ、お前まで！
嘘なんかついてないってー！」

カランコロン！

店の入口の扉の鈴が鳴った。

そこに現れたのは、スラッとしたスタイルの女性。ボーイッシュな髪型に端正な顔立ちが宝塚の男役のような感じだった。

あ！

ユルコは声を上げそうになった。
すると、パブ姉が先に声を上げた。

「あらやだ！ 穀子〜？」

千忽方穀子はフツと笑みを浮かべて会釈をした。

「お久しぶりです。パブ先輩」

「え？ え？ パブパイセン〜！？」

ユルコは口をバクバクして、パブ姉と千忽方穀子を見比べながらキョロキョロした。

「先輩だなんてやめてよ。
私はそれらしいこと一切しないで、あの劇団を去ったんだから…」

「またまた、そうやって謙遜するところ変わってないですね」

「それにしても、よくここが分かったわね。
あ、とりあえず座って」

パブ姉は目の前のカウンター席に座るように手で促した。
千忽方穀子は頷くと、スマートに男役のような動きで椅子に腰掛けた。
同時に光り輝く『ダブルドラゴン』をカウンターテーブルの上に置いた。
ウロコの輝きがダンスホールのミラーボールのようだった。さらに2本の美しい龍の頭は、見ただけで子宮に訴えかけてくる魅惑の流線形をしていた。
真宮子はフラフラと吸い寄せられるように『ダブルドラゴン』に近づいていった。

「私の中の熱いトマトがスープになりそう…」

魅了されている真宮子に気づいた千忽方穀子。『ダブルドラゴン』をそっと手に持ち、拳銃を撃った後の煙りを吹く仕草をした。

「お姉さん、興味ありそうだね。
『ダブルドラゴン』の筆下ろし。
試してみるかい？」

一瞬で心を奪われた真宮子は、コックリと頷いた。

「やめろー！ 真宮子ー！」

ユルコは叫びながら真宮子を後ろから抱きしめ『ダブルドラゴン』から引き離した。

「あれ？」

ユルコに気づいた千忽方穀子。

「君はさっきの？
パブ先輩の店の人だったんだね。
ハハ、なんていう偶然なんだ」

「え？ 何？
ユルコを知ってるの？」

パブ姉は赤ワインと干しぶどうを千忽方穀子に差し出しながら聞いた。

「いや、知り合ったのはさっき。
彼女はバイブの恩人だよ」

「バイブの恩人！？」

「そう。私が初めてやったパチスロで困っていたら彼女が全部エスコートしてくれたんだ。それに『ダブルドラゴン』までプレゼントしてくれたんだよ」

かなり過大評価されていたが、ユルコは乗かった。

「ほらパブ姉！ 言ったじゃんかー！
人助けしたお礼だって」

ユルコは堂々とセブンスターを切り、トントンと指で叩いて1本引き抜くと、マッチで火をつけ勝ち誇ったように煙りを吐いた。

「そうね、疑ってごめんねユルコ。」

あんたも座って飲みなさい」

ユルコを殻子の隣りに座らせると、赤ワインと干しぶどうを差し出した。
すると店の片隅で、いじけたように黒縁メガネを拭いている真宮子が見えた。

「あらごめん！
真宮子もこっちいらっしゃい」

「... もうすぐ開店の時間なのでは？」

モジモジしている真宮子。

「今日はもういいわ。
殻子との再会を祝して皆んなで飲みましょう！」

パブ姉が真宮子の分の赤ワインと干しぶどうを差し出した時だった。

「♪ 歌い出そう～
バイブをオンにして～」

千忽方殻子は立ち上がり急に歌い出した。

「♪ バイブはバイブ～
マイクじゃないのよ～」

パブ姉も応えるように歌い出した。

「♪ 信じてオン～
忘れてオフ～」

「♪ 信じてみるわ～
あなたと一緒に～～」

「♪ ♪ バイブオ～～～～ン」

二人は両手を広げ、気持ち良さそうに歌い切った。

「なんのこっちゃ！」

ユルコはタバコを吹かしながらワインを飲み干した。

「おおだぁぁりい…」

真宮子は涙を流しながらユルコにツッコんでいた。

「何泣いてんの!？」

「コレで泣けるって、あんたの感性ぶっ壊れてんじゃないの？」

「ユルコ！」

パプ姉は首を横に振った。

「人それぞれ感情のタンクの大きさは違うもの。間違いも無ければ正しいもない。泣いてる人を悪く言ってはダメよ」

「ええ〜？ よくわかんないよパプ姉。

「私にどうしろって言うんだよ」

「歌うのよ！」

「そうだ！一緒に歌おうユルコさん！」

パプ姉と千忽方殻子は姿勢を正して、また歌い出した。

「♪♪バイブオ〜〜〜ン！」

「もういいってそれ！」

ユルコの呆れた顔をよそに、パプ姉と千忽方殻子は懐かしさと変わらないやり取りに安心したのか、顔を見合わせて笑った。

「ねえ、殻子。

「本当の所はどなの？」

「昔の知り合いを訪ねるなんて、死ぬ時か過去を精算する時のどっちかよ？」

パプ姉は真顔になり、スッと千忽方殻子を見据えた。

「フッ、パブ先輩残念でした。
どっちもハズレ」

千忽方穀子の表情は自信に満ち溢れていた。

「パブ先輩が昔好きだったラジオ番組覚えてますか？
『ロケットパンティーナイト』
今でも放送してるんですよ」

「え？
覚えてるも何も、今でも聴いてるわよ」

「うわ～そうなんだ、良かった！
変態と一緒に世界を救うなんて途方もない話をパブ先輩は熱く語ってた」

「そうね、あの頃は熱かったわ。
でも穀子が、そんなことを覚えててくれたことだけでも嬉しいわ」

「違う、覚えてただけじゃない」

「え？」

「『バイブスター』千忽方穀子として、
来週『ロケットパンティーナイト』に出演することが決まったんだ！」

喜びと感動を全面にさらけ出した千忽方穀子。
スナック『パブパブ』はそのパワーにちょっと揺れた…

第3話 『あびるのジョー』

変態の終着駅と呼ばれる街『大塚』

飯尾数子は、初めてこの街に足を踏み入れた。『乳首アート』の依頼主の住所を、スマホの地図で確認していると、突然雨が降り出した。

「え！ ウソでしょ？」

慌てた数子は駅前の軒下に身を隠した。

雨は一瞬で土砂降りになり、とてもじゃないが歩き出せる状態ではなくなった。

「うわ~どうしょ！

傘持ってきてないし」

急に出くわしたゲリラ豪雨に足止めを喰らった。いつ止むのか分からない空を見上げた。あきらめて視線を下ろすと、軒下には入らずにゲリラ豪雨を全身で浴びている男の姿が見えた。

男は顔を空に向け、気持ち良くシャワーでも浴びているかのようだった。

不思議とその姿を美しく感じてしまった数子は見惚れた。

すると視線に気付いたのか、男はふと振り返り数子と目を合わせた。

ドキッとした数子の元に、ゆっくりと近付いて来た。

「大丈夫、

この雨はあと5分後に止むから」

男の甘い声は電流のように体の中を流れて子宮に響いた。

ズキュン！

「あん、」

数子は思わず吐息を漏らした。

スラっとしたモデルのようなスタイルに甘く爽やかな顔立ち。微笑みかけてくる男に、心を奪われそうになった。

だが、数子はグッと堪えた。

「だ、誰あんた？」

馴れ馴れしく話しかけないで」

「大丈夫だよ」

ズキュン！

声の周波数が子宮に響く。

男はスッと手を伸ばし、数子の耳元に手を添えた。

「やめて、触らないで！」

慌てて後退りした。

「揺れてる君を止めてあげようと思って」

ズキュン！

「な、何よ！

揺れてなんかないし」

ズキュン！

「迷ったらおいで。

僕ならいつでもいるから」

男は優しい笑顔のまま、何かを数子の前に差し出した。

—————

ホストクラブ

『HENGENE(ヘンジン)』

No. 1 ホスト

『あびるのジョー』

TEL XXX-3210-1919

一枚の名刺だった。
数子は抗いきれず受け取った。
男は優しく頷くと踵を返し去っていった。

何だったの今の！？

声を聞いただけで立っていられなくなる感覚。呆然としていた数子は、ふと空を見上げた。
すると、ゲリラ豪雨は嘘のように止んでいた...

「ありがとうございました。
この乳首なら絶対、彼に嫌われると思います」

「ええ、
でも今回のエイジング加工は、本来私が目指す『乳首アート』とは違うから。
そのことだけは覚えておいてね」

「はい！
彼とキッチリ別れたら、次はファンタジックな乳首にして下さい」

「OK！
その時は、あなたの乳首に魔法をかけちゃうわよ」

「キャハッ
数子さんマジ神！」

大塚駅近くの団地の最上階。
玄関先で女子高生から5万円を受け取ると、数子は深いお辞儀をして扉を閉めた。
沈みゆく太陽の光りが団地を照らしていた。
顔を持ち上げ振り返ると、数子は夕陽に目を細めた。
『ロケットパンティーナイト』出演以来、『乳首アート』の依頼は爆発的に増えた。
だが、その一方で他人が望む乳首に Corresponding だけの自分に虚しさを感じ始めていた。

『迷ったらおいで...』

さっきから心に囁きかけてくる、あの声。
数子は財布から名刺を取り出した...

ホストクラブ

『HENGENE(ヘンジン)』

ここだ。

数子は錆びついたブリキの看板を見上げた。

ホストクラブの派手なメージとは違う、歴史を感じる店構えだった。

数子は運命に背中を押され店の扉を開けた。

目の前に飛び込んできたのは、広々としたスペースの中央に置かれたヨーロピアン風の
バスタブだった。スポットライトが当てられ、異様な存在感を醸し出していた。

高級そうなソファが壁の周りに並べられ、バスタブを觀賞出来るような作りになって
いた。

「お帰りなさいませ、お嬢様。

お風呂にしますか？

それとも、私にしますか？」

店内に見惚れていた数子の前に、執事姿の若い男がスッと現れた。

手に持っていたのは風呂桶とタオルだった。

「え、何ここ？

銭湯？」

「いえ、ホストクラブです。

これはグラスとおしぼりです」

「ええー!？」

数子は若い執事に案内されるがまま奥の席に座った。フカフカの高級ソファに体を沈めると、目の前のテーブルに風呂桶とタオルが置かれ、若い執事はお辞儀をして去っていった。

この風呂桶に酒が注がれて飲まされるのか？
あの中央のバスタブは何？

数子がここに来たことを後悔し始めた時だった。
スマートな身のこなしで、一人の男が現れた。
ラメの入った黒シャツが特徴的だった。
よく見ると、乳首周りの生地が綺麗にくり抜かれていた。

「え!？」

数子は男の顔を見ると声を上げた。

「ああー！ これはこれは、
お久しぶりです。飯尾数子さん」

気さくに振る舞う男は『ロケットパンティーナイト』で対談した松野反甘尾だった。

「ちょっと、何であんたがいるのよ！」

「ハハ、お恥ずかしい話、
『乳首よ野生に帰れ』が売れたので、調子に乗って2作目を出版したんです。
『乳首でビバーク』
これが大ゴケしましてね。
乳首作家として自信を失くしてしまいました。そこで乳首をもう一度勉強し直そうと決意し、ホストクラブに就職したんです」

「だからって何でここなのよ…」

初めてのホストクラブで知り合いに会うなんて、数子は恥ずかしくてやりきれなかった。

「あ、そうそう数子さん。
見て下さい私の乳首を。
以前と変わったと思いませんか？」

立ったまま恥ずかしげもなく見せてくる松野反。くり抜かれた黒シャツの乳首周りをしかたなく見た。
すると以前はミステリーサークル乳首だった乳毛が、クルンッとカールされてポンデリ

ングのようになっていた。

『『乳首アート』です。

乳毛にパーマを当ててみました」

「やめて！

そんなのと一緒にしないで！」

数子が立ち上がって帰ろうとした瞬間だった。

『ドンガラガッシャーーン！』

店内のスピーカーから雷が落ちたような音が響いた。

「キヤーー！！」

数子は驚いてソファに尻もちをついた。

『浴びぬなら浴びせてみせようシャバダバダー』

呪文のような言葉がスピーカーから流れた。

すると店の中央にあったバスタブの中から、白のフレンドシ姿の男がスッと立ち上がり現れた。

その佇まいは神々しく彫刻作品のようだった。

「うわ！ いきなりジョーさん！？」

すごいですよ数子さん！

『あびるのジョー』がこの時間に出てくるなんてありえない！

あなたは選ばれた人だ！」

興奮して数子に話しかけたが、松野反の声は届いていなかった。

数子はジョーの神秘的な雰囲気完全に心を奪われていた。

無意識のまま立ち上がり、フラフラと吸い寄せられるようにバスタブに近づいていった。

「必ず来てくれると思った」

ズキュン！

ジョーの言葉が子宮に響く。
数子は抗うことなく流れに身を任せた。

「浴びせてくれるかい？」

ズキュン！

数子はコックリと頷くと、スカートの下のパンティーを脱ぎ捨てた。
ジョーに手を差し伸べられ、数子は恥ずかしげもなくバスタブの縁にまたがった。
その下に潜り込むように、ジョーはバスタブの中に寝そべった。

「さあ、君の声を聞かせておくれ」

ズキュン！

「あはん…」

数子は薄れていく意識の中に光りを見た。
自然と力が抜けると、光る液体が数子の股からチョロチョロと流れ落ちた。

「おお～シャバダバダ～」

ジョーは顔から光る液体を浴びて恍惚の表情を浮かべた。液体を舐めなると覚醒したように目を見開いた。

「君は犬を飼っているね？」

ズキュン！

「なんで…なんで知ってるの…？」

「レーズンバター」

ズキュン！

「え…なんの…こと？」

「レーズンバターを塗って犬に舐めさせているね？」

ズキュン！

「やだ...そんな...どうしてわかるの...？」

「ペロペロペロー」

ジョーは声のボリュームを上げた。

ズキュンズキュン！

「ちょっと、あはん」

「ペロペロペロペロペロペロー」

「ああ〜〜おかわり〜〜」

数子はガクガクと膝を揺らし、バスタブの中に崩れ落ちた。

ジョーはそっと受け止め抱きしめた。

「よくできました」

幸せそうに眠る数子の頭を優しく撫でた。

「す、すげー...

あの飯尾数子を昇天させちゃったよ。

さすがジョーさんだ」

松野反が感動していると、身を起こしバスタブから出てくるジョーがいた。

松野反の前に来るとタオルで顔を拭きながら聞いた。

「君が出演したラジオ番組

『ロケットパンティーナイト』はどうなった？」

「あ、はい！

ジョーさんの話をしたら、ぜひ出演して欲しいとのことでした」

「それで？」

「来週だと『バイブスター』との対談になるそうです。

どうしますか？」

「全然シャバダバダ」

「なるほど」

松野反はよく分からなかったが、OKだと解釈した...

第4話 『異種格闘技戦』 前編

「♪ヒュ〜ヒュヒュ〜ヒュヒュ〜」

ユルコは口笛を吹きながら短パンに手を突っ込んで歩いていた。
いつもの出勤風景。大塚駅からシャッター通りを抜けていくと、視線の先に見慣れない男の人ばかりが見えた。

「お！ 何だ何だ？」

好奇心に駆られたユルコは男たちの中に紛れ込んでいった。人ごみを掻き分けていくと、真新しい看板を見上げた。

大塚名物キュウリ一本漬け
『女の壺』

キュウリ一本漬け？ そんな名物あったっけ？

怪しい...

ユルコはさらに人を押しのけながら奥に進んでいくと店内にたどり着いた。
活気のある店内は八百屋の市場のようだった。籠がズラッと並び、1本ずつ真空パックされたキュウリが敷き詰められていた。
真空パックひとつずつに女の顔写真付きのプロフィールが貼られている。そのプロフィールをよく見ると、漬物生産者の直筆のコメントが書かれていた。

『今回は頑張って奥までしっかり漬けたよ☑』

『浅めだけど長めに漬けたよ☑』

などなど...

『女の壺』って自分の穴に漬けてるのか!?

売れる為の加工された顔写真が嘘くさい。

さすが大塚と半分呆れたが、漬物は飛ぶように売れていった。

まさに変態市場。1本3千円の『女の壺キュウリ』が狂ったように売れていく。

ユルコはその中で、ふと売れ残っているキュウリの籠が気になった。

顔写真付きのプロフィールに目をやった。

黒縁メガネにおかっぱボブ。

コメントには、

『ピッチピチのアラフォーつゆだくよ☑』

とあった。

「え？ 真宮子!？」

ユルコは目を擦って写真をもう一度見たが、やっぱり真宮子だった。

何やってんだ!？ あいつ...

出勤したら聞いてやろう。ユルコは漬物屋を出ようとした。

その瞬間だった。

「半額スーパーセール!」

店内のどこからか声が響いた。

真空パックのキュウリを手に持って現れたのは真宮子だった。

「私はこの漬物の生産者です!

このキュウリはなんと、スクワットをしても落ちなかった縁起物です!

受験生の方には是非お勧めです!」

あまり見ない生産者のアピールに、お客の男たちは一瞬静まり返ったが、興味がないと分かると再び店内に活気が戻った。

「なんと 80% オフです!

ウソです! 90% オフです! ウソです! 100円でです! ウソです...」

真宮子の必死の値引きスーパーセールは、店内の活気に掻き消されていった。

見兼ねたユルコは近寄って真宮子を後ろから抱きしめた。

「バカが！
自分を安売りするんじゃないよ！」

「何！ 誰！？
ちょっと離してよ！
ユルコには関係のないことです！」

ユルコを振り切ると真宮子は再びスーパーセールを始めた。

「今なら漬物体験もやってまーす！
入れ放題でーす！」

「やめろ真宮子ー！」

ユルコは力づくで店の外に連れ出した。

「はあ、はあ、はあ、
どうしちまったんだよ真宮子。
変態男たちに媚びるなんて…」

「媚びてなんかいません！
私は変態の可能性について研究しているだけです！」

「変態の可能性？」

「やさぐれて酒ばっか飲んでるユルコには到底分からない領域です」

真宮子はフンッと顔を背けると、スタスタと何事もなかったようにその場を去っていった。

「キュウリをアソコに突っ込んで、何の可能性があるって言うんだよ？
おい！
待てったら真宮子ー！」

ユルコは、あっという間に遠ざかる真宮子の背中を追いかけた…

変態がまばらに彷徨い始める時間帯。
電飾看板がチカチカと消えそうに灯る。

スナック『パブパブ』

カランコロン！

店の扉の鈴が鳴った。

「おはようございます！」

「おいーっす！」

真宮子のすぐ後ろにユルコも出勤して来た。

「あらやだ珍しい、
二人揃って出勤だなんて」

パブ姉は、いつも通りの割烹着姿で、お通しを盛り付けながら言った。

「ほら、あんたたち！
今日は何の日か分かってる？ 水曜日よ」

「あ！『ロケットパンティーナイト』」

真っ先に気付いたのは真宮子だった。

「そう！
しかも今日は穀子が対談する日よ！
さあさあ、とりあえず店はいいから座って。
皆んなで飲みながら聞きましょう！」

いつになくパブ姉は、はしゃいでいた。
真宮子とユルコに日本酒のコップ酒を差し出すと、一緒にキュウリの漬物も添えた。

「あれ？ 珍しいねパブ姉。
いつも干してるヤツばっかなのに、今日は漬物？」

ユルコは小皿に出されたキュウリの漬物を見て言った。

すぐに日本酒に口をつける。

「よく気付いたわねユルコ。

そうよ、これは新しく出来た漬物屋で買ってきたものよ」

ブッ！

ユルコは日本酒を吹き出した。すぐさま真宮子と目を合わせた。

「この漬物は真空パックで売られていた物では？」

真宮子は恐る恐るパブ姉に聞いた。

「え？ 何で知ってるの？

そう、コレに入ってたヤツよ」

そう言って、口の開いた真空パックを取って二人に見せた。プロフィールには、お婆さんの顔写真が貼ってあった。

「やっぱり生産者の顔写真が貼ってあるのって安心よね～

でもこの『今回は味噌漬けに挑戦してみました☑』て何のことかしら？」

「オエエ～～！！

私知らない！ 真宮子にあげる！」

ユルコは小皿の漬物をスッと真宮子の方にやった。

「ちょっとやめて下さい！

私は漬物生産者側なのです。

消費者の意見を聞かせて下さい！」

真宮子は自分に出された漬物も合わせてユルコに突き返した。

「ふざけんな！ 生産者側なら味見しろ味見！」

ユルコは箸で漬物を一切れ摘むと、真宮子の口元にやった。

「キャー！ やだやだ味噌漬け嫌いですー！」

パンパン！

パブ姉は両手を叩いた。

「ほら、じゃれてんじゃないわよ。

もう始まるわよ」

パブ姉は店内のスピーカーのボリュームを上げた。

wwwwww

「世界の爆弾をすべてパンティーに変えてしまおう！ 変態が世界を救う！

『ロケットパンティーナイト』

司会は私、咲穂竹汁男がお送りしまーす！

はい！ もう皆さんご存知、この番組は毎回あらゆるジャンルのエキスパートをお呼びして対談形式で色んな角度から世界平和を導き出していくという。

社会派エンターテイメント！

ロケットスパパパンティーナーイツ！

さあ、今週もこだわり強めのエキスパートさんたちをお招き致しました。

早速ご紹介致しましょう！

浴びた女の聖水は数知れず。

浴びたらすべてが分かる男。

ホストクラブ『HENGENE(ヘンジン)』の

No. 1 ホスト『あびるのジョー』さんでーす！」

「浴びぬなら浴びせてみせようシャバダバダ。こんばんは、あびるのジョーです。

ジョーと呼んで下さい」

「ジョーさんは甘いマスクにセクシーボイス。落ち着いた色気が漂っています！ さすがNo. 1 ホストといったところでしょうか？

はい、そしてそんなジョーさんと対談して頂くのはこの方。

変幻自在のバイブレーション。

千のバイブを操り光速でエクスタシーに導くことから『バイブスター』の異名を持つ女。

バイブ業界きっての精鋭。

『千忽方 穀子(ちこつかたからこ)』さんでーす！」

「♪あなたのオフをオンにする～

バイブオ～～～ン！

初めまして千忽方穀子です」

「おおーっと！ 黒服を身に纏い、歌いながらの登場です！ 美しさとカッコ良さを兼ね備えた殻子さんは宝塚の男役のようです。研ぎ澄まされたフェロモンがミサイルのように発射されていまーす！」

wwwwww

「キターーッ！
殻子ー！ ファイトー！」

♪ドンドンドンパフパフー！

パブ姉は興奮気味にタンバリンとオモチャのラッパを鳴らし紙吹雪を撒いたりと大忙しだった。

「何か面白そうな対決じゃん。
『あびるのジョー』と『バイブスター』
どっちが勝つと思う？ 真宮子」

ユルコは日本酒のコップ酒を飲み干し、真宮子を覗き見た。

「分かってませんねユルコは。
変態に勝ち負けはないってパブ姉さんが教えてくれたでしょ？」

「何だよそれ？
キュウリをアソコに突っ込む勇氣はあるのに、私との勝負はビビって出来ないか？」

絡んでくるユルコに対し真宮子は、やれやれと溜め息をついた。コップ酒を一気に飲み干すとカウンターにタンッとグラスを置いた。

「殻子さんの圧勝です！」

「ヒュ～、そうこなくっちゃ！
OK！ 私は『あびるのジョー』に一万だ！」

「お金なんか掛けません！
負けた者はコレです」

そう言って真宮子がカウンターの下から何やら取り出して、目の前にドンッと置いたの

は大根だった。

「これで漬物を作ってもらいます」

「え？

漬物ってまさか『女の壺』で？」

「当然です」

「ま、マジかよ！？ 真宮子…」

ユルコは太い大根を見て固まった。

「どうしましたか？ ユルコさん。

ビビってアソコが閉じちゃいましたか？」

「ふ、ふざけんじゃね～誰がビビるか～

やったろうじゃない。

『あびるのジョー』が勝つに決まってる！ 大根でも一升瓶でも何でも持ってこーい！」

「何よ、あんたたち。

ラジオ聞いてないの！？

だったら自分たちで勝手にやって！」

パプ姉は一升瓶を二人の前にドンッと置いた。本当に一升瓶も来てしまった。

ユルコの脂汗は掘り当てた温泉のように吹き出した。

wwwwww

「ジョーさんと殻子さん。二人ともスタジオ内に道具を運び入れてますが、どういった物か説明して頂けますか？

まずはジョーさん。

ヨーロピアン風のバスタブが所狭しと置かれています。これは一体何に使う物ですか？」

「ええ、これはシャバダバダの聖地です」

「シャバダバダの聖地？

もう少し詳しくご説明頂けますか？」

「迷える聖水を浴びて昇天させる天の声。
『浴びぬなら浴びせてみせようシャバダバダ』
それがシャバダバダの聖地です」

「なるほど。
セクシーボイスで語られると不思議と説得力がありますね。バスタブの美しい曲線が昇
天へと導くシルクロード。
といったところでしょうか？
そして対する殻子さんなんですが、テーブルに置かれた大きめのコケシ。
これはパイプですか？」

「はい。
今回対談するお相手が男性だということを知り、急遽アメリカから取り寄せました。

男性専用パイプ『ダルビッチ』です。

使いこなすほど自分のスタイルにフィットしていく馬革を使用し、カリの部分の縫い目
には、変化を掛けやすい良いようにグラスファイバーが使用されています」

「なるほどなるほど、アナルほど。
今夜は対談と言うより『異種格闘技戦』のような技と技とのぶつかり合いが期待されそ
うです！」

wwwwww

「本気だわ。殻子は本気だわ！
『ダルビッチ』を呼び寄せるなんて！」

期待が膨らむパブ姉は、鼻息を荒くした。

「何？
パブ姉は『ダルビッチ』知ってるの？」

ユルコは聞いた。

「知らないわ！
でも伝わってくるの！ ラジオを通してだけど殻子の決意というか、この対談に掛ける思
いが！」

「はあ？」

分かってはいたけど、パプ姉は穀子さんを応援する。そして真宮子も穀子さんを応援する。

成り行き上、逆張りで『あびるのジョー』に賭けてしまったのは私だけ。さらに大根と一升瓶が睨みをきかせている。

完全にアウェーだ。

ユルコの噴火する脂汗は、ハワイの活火山のように噴き荒れていた...

第5話『異種格闘技戦』後編

wwwwww

「さあ、早くもスタジオ内の空気は緊張感に包まれております！ 対戦を目前に両者が開始のゴングを今か今かと待ち侘びています！ すでに服を脱ぎ捨てフンドシー丁となり、バスタブを入念にチェックしているジョーさんです。対する穀子さんも『ダルビッチ』に、これまた入念にローションを塗り込んでいます。

さあここで、お二人に応援メッセージが届いています。早速、紹介していきましょう！
まずはジョーさんからです。

『お久しぶりです、咲穂竹汁男さん。
松野反甘尾です』

おおー！ この方は前回出演して頂いた『乳首作家』の松野反さんです！

『ロケットパンティーナイト出演後、色々なことがありまして、今はホストクラブ『HENGENE』でお世話になっています。そこで出会ったジョーさんが凄すぎるので、今回の出演を推薦させて頂きました。

ジョーさんの天から与えられた声は、女性の子宮に直接響くと言われている周波数49ヘルツなんです。これは一般人が逆立ちしても出せる声ではありません。さらに聖水を浴びたらすべてが分かってしまう特殊能力があります。感じる言葉を探し当て49ヘルツの声に乗せて囁くと身体に触れずして女性は、たちまち昇天してしまうのです。

追伸

飯尾数子さんもジョーさんに昇天させられていました』

オウ！ イッツグレイツ！

あの飯尾数子さんを昇天させたとはスゴイ！

一体どんな言葉で昇天させたのか気になるころではありますが、今分かったことはジョーさんの変態能力は計り知れないということです！」

wwwwww.

あびるジョーの応援メッセージを聞いて、パブ姉は勢いを無くし黙ってしまった。

「大丈夫ですよ、パブ姉さん。
耳を塞いでしまえばいいんです」

真宮子が慌ててフォローする。

「そ、そうよね。
声だけで昇天なんてありえないわよね」

二人は励まし合うようにコップ酒で乾杯した。
その横でヘラヘラと笑い出したのはユルコだった。

「うおお～！ あびるのジョー強えー！
飯尾数子倒したー！！
スゴくない？ ねえねえスゴくない？」

嫌味なほどはしゃぎ始めたユルコ。

「真宮子！ お前だって大根はさすがにキツイっしょ？ いいよ、少し削ってあげるよ！
パブ姉、ピーラー貸して！」

しかたなくピーラーを渡すパブ姉。
ユルコは一人楽しそうに大根の皮をシャッシャッと剥いていくと何やら形にしていった。

「あははー！
見て、白い亀頭」

ピーラーを器用に使い、男性器の形に大根を仕上げた。

「やば！ 私パイプ彫刻家の才能あるかも？」

ユルコの悪ノリはすでに『あびるのジョー』の勝利を確信しているかのようだった。

wwwwww

「さあ、続いては殻子さんの応援メッセージです！

『お久しぶりです、殻子さん。
と言っても覚えてらっしゃないと思いますが、奈太良ヶ丘 守子 (なだらがおかもりこ)
です。』

殻子さんはバイブ歴1年の未熟な私を、昇天という桃源郷へ連れて行ってくれた初めての方です。

殻子さんの変幻自在のバイブレーションは、例えるなら『バイブのオーケストラ』です。媚薬入りのローションで快感のつぼみを軽やかに刺激するのはマリмба。理性を溶かすフルート。長いストロークからのピストン運動で性感帯を探すトロンボーン。GスポットとPスポットを交互に刺激する打楽器のティンパニ。クライマックスへ向けて目眩く刺激のフォルテッシモ。バイブが織りなす快感の旋律は、この世のものとは思えませんでした。

あの時の感動が忘れられず、また殻子さんにお会いしたいと思い予約をしたのですが、3年先と言われてしまいました。

『バイブスター』という名の流れ星は、私の心と身体に昇天を与えて通り抜けていきました。またいつお会い出来るか分かりませんが、星に願いを込めて待ち続けます」

「オウ！ ファンタスティック！

『バイブスター』の殻子さんは、まさに昇天の総指揮者！ 男の私でも聞いているだけでゾクゾクしてしまいました！

そして日々お忙しい殻子さんですが、このメッセージをくれた守子さんの事は覚えてらっしゃいますか？」

「ええ、もちろんです。

とても素晴らしい感性を持った女の子でしたよ。守子さん！ またいつかご一緒に、

♪バイブオ〜〜ン」

「♪バイブオ〜〜ン

ワオ！ つい釣られてやってしまいました！

ところでわたくし汁男、ひとつ気になることを見つけてしまいました。殻子さんがいつもお相手するお客様は、皆さん女性の方ですか？」

「はい、そうです。

私たちのバイブ業界は『夜の宝塚』と呼ばれるほど女性のファンが多いですね」

「なるほど。

ということは、今回お相手するジョーさんは男性ですが、初めてということでしょうか？」

「はい。

でもご安心を。前立腺の位置はイメトレしていますので問題ないと思います」

「おおーっと！ これはまさかの殻子さん男性初挑戦！ 百戦錬磨のジョーさんに対して通用するのでしょうか？ 急にオッズが高くなりそうな発言ではありましたが、結果はどうなるのか分かりません！

果たして『バイプスター』の名を汚すことなく光速で昇天へと導くことができるのか？

はたまた『あびるのジョー』の49ヘルツで子宮がシャバダバしてしまうのか？

対戦の行方に目が離せません！

その模様はCMの後すぐ！

wwwwww

「フゥ〜〜」

パブ姉と真宮子は同時に息を漏らした。

またしても、その横でニヤニヤと酒を飲むユルコが口を開いた。

「パブ姉、ゴマ油くれる？」

「何よ急に。

そんなもの何に使うのよ？」

「いいからいいから。

私の優しさだと思ってさ」

パブ姉は訳がわからなかったが、ゴマ油をユルコに差し出した。

ユルコはゴマ油を手にとると、ダラダラと大根の『白い亀頭』にかけ始めた。

「真宮子！ 滑りを良くして入りやすいようにしてあげるからな」

すでに勝ったかのようなユルコは、満遍なくゴマ油を白い亀頭に塗り込んでいた。

その姿を冷やかに見つめるパブ姉と真宮子だった。

wwwwww

「おおーっと！

ここでいきなり殻さんが黒服の下のズボンとパンティーを脱ぎ捨てたー！」

「聖水を浴びたいって？

今まで何を浴びてきたか知らないけど、私の聖水はポロロッカ。男ごときに何が分かるかな？」

「おおー！ カッコイイー！ 穀子さんのスイッチが入りましたー！
物怖じせずバスタブの縁に大股を開いてまたがりましたー！ 迎え撃つジョーさんは、バスタブの底にひっそりと身を潜めました！」

ブッシャー！

「皆さん聞こえましたでしょうか！？
穀子さんのポロロッカが今、堰き止めたダムが決壊するように噴射されましたー！
顔だけではなく、ほぼ全身に聖水を浴びたジョーさん！ 恍惚の表情を浮かべています！
どういことでしょうか！？ 私には全く分かりません！
おや？ ジョーさん舐め始めましたよ？
穀子さんのポロロッカを舐めて何かを確認しているようです」

「君に含まれている成分はズバリ、愛だ！」

「決まったー！
ジョーさんの 49 ヘルツの音が穀子さんの子宮に突き刺さるー！！」

「私は愛など知らない。
知っているのは昇天か昇天じゃないかだけさ」

「おーっと！
突き刺さってなかったー！
ジョーさん痛恨のミス！ 聖水を見誤ったのか！？ 穀子さんの子宮には響いてなかった
ようです」

「ちょっと待ってくれ！
君の聖水はおかしい！ 何も見えない！ 何も分からない！」

「フン、だから最初に言ったじゃないか。
男のアンタに私は分からないって。
つべこべ言わずフンドシ取ってケツ出しな！」

「おおーっと！ 強い！ 穀子さん強い！ 圧が強い！ 言われるがままにジョーさんは、フンドシを下ろして四つん這いになりましたー！

さあ！ プレイボール！

穀子投手の『ダルビッチ』が今、その威力を見せつける時が来ました！

初球はどうだ！？

大きく振りかぶって『ダルビッチ』をジョーさんのアナルに突き刺したー！

伸び上がるようなストレート真っ向勝負！」

「ハッ、ハウ！」

「ジョー選手たまらず息を漏らしましたー！ これはストライクと判断していいのでしょうか！？」

「ボールだ、ボール！

全然外れてるよ！」

「ジョー選手、ボールをアピール。

本人が言うのであればそうでしょう。

穀子さんの第一投目は...

ボール！」

wwwwww

「♪ピッチキャッチ内野外野皆んな上手い

特にカーラコー！」

「♪特にカーラコー！」

パプ姉と真宮子はお祭り騒ぎ。球場で応援してるかのようだった。

一方で白い亀頭に塗りたくったゴマ油を拭き始めるユルコがいた。

ふと、店の壁を見ると今まで見たことない手錠に気付いた。両手両足を広げた位置に埋め込まれている。

「パプ姉、何この手錠？

こんなのあったっけ？」

「ああ、それはこの前のお客さんが碟(はりつけ)プレイが好きだからって勝手に取り付けていったものよ」

「勝手に！？
何でOKしたの？」

「何でって、断る理由なんかないじゃない。
どうしたのよ？ ユルコ。何を怯えているの？
落ち着いてゆっくり続きを聞きましょう」

一度引いたはずの脂汗が、ポロロッカのように逆流してくるユルコだった。

wwwwww

「スタジオ内の温度は、一気に急上昇！ 盛り上がり参りましたー！
さあ、穀子さんがここで『ダルビッチ』に何やら新しいローションを塗り始めました。
穀子さん、それは一体何でしょうか？」

「汁男さん、これはローションではありません。『エシレバター』です」

「エシレバター？
普通のバターと何が違うのでしょうか？」

「発酵バターです。発酵の効果で腸内環境が活発になり、バイブの食いつきが良くなるんです。さらにバターの油分がストロークを滑らかにし、前立腺を色んな角度から攻めることが出来るんです」

「素晴らしい！ さすがバイブスター！
バイブに関する知識量が半端じゃないです！ さあ、発酵バターまみれの第二球。
今度は脇を締めコンパクトなフォームでバイブを押し込んだー！
ジョー選手のアナルに鋭く突き刺さるー！
どうだ！？」

「ハッフーン！」

「何とも表現し難い声を出すジョー選手！
これはストライクカー！？」

「ボ、ボール…」

「声を振り絞ってボールを宣告しましたー！
なんと穀子投手、二球続けて…
ボール！」

「フゥ…」

「穀子投手、一呼吸おくと立て続けに三球目にいったー！

おお？『ダルビッチ』を突き刺した後に手首を返しましたー！ これは！？」

「チェンジアップさ」

「ウ、ウッフ～！」

「さあどうだ！？

今度こそストライクか！？」

「ボーフ…」

「ボーフ？

ちゃんと発音しないと、ストライクと見なしますよ！ いいですね？」

「…ちょっと待って、ボールだ」

「おっと慌てて意識を取り戻したジョー選手！ この判定もまたボール！

これでカウントはノースリー！

穀子投手、優位の流れから一気にピンチ！ もう一球も外せない状況に追い込まれましたー！

wwwwww

「外せ、外せ、外せ…」

白い亀頭にすがりつき、神頼みでもするかのように祈るユルコだった。

「ヒューヒュー！ バッチビビってるよー！」

「バッチビビってるよー！」

穀子の勝利を信じてやまないパプ姉と真宮子は、ノースリーの状況でも勢いを増して応援し続けた。

wwwwww

「さあ、深呼吸をして『ダルビッチ』を握り直す穀子投手。

集中した表情には凜々しさが感じられます。

意を決して振りかぶりました！

しなやかなフォームから放たれる『ダルビッチ』は綺麗にジョー選手のアナルに突き刺さりましたー！

おおーっと！ さらに下に押し込んだー！

こ、これは！？」

「フォークです」

「おおーっと！ ここで前立腺に鋭く落ちるフォーク！」

「ツアー…」

「ツアー？

ジョー選手、アナルツアーに行って来ますということでしょうか？

さあ、これはどうだ？」

「……………」

「おおーっと！ 声が出ないジョー選手！

ピクピクとケツが痙攣しています！

アナルツアーに行きましたー！

ストライク！！」

「フゥ…」

「ようやくワンストライクを取り返した穀子投手。もう目に迷いがありません！

畳み掛けるように『ダルビッチ』を放ったー！ フォームは先ほどと一緒だー！

ということは！？」

「フォークです」

「絶対の自信！ 二球続けてフォークでいったー！ これはどうだー！？」

「カ、カムサハムニダ…」

「おおーっと！ ジョー選手、何故かここで韓国語で『ありがとう』

これは間違いなくストライク！！

見せます！ 好勝負です！ カウントはツースリー！ フルカウントになりましたー！

泣いても笑っても次の一球で、すべてが決まります！

wwwwww

♪ドンドンドンパフパフー！

「いけー殻子ー！」

「決めて下さーい！ 殻子さーん！」

「立てー！ 立つんだージョー！」

スナック『パブパブ』も最高潮に盛り上がっていた。

wwwwww

『『バイブスター』と『あびるのジョー』の対戦がここまで白熱するとは誰が予想出来たでしょうか！？ どちらが勝っても『ロケットパンティーナイト』史上最高の名勝負になることは間違いありません！ この世紀の一戦を実況出来るわたくし汁男は幸せ者です！ さあ、来ました！ 殻子投手が最後の投球『ダルビッチ』を振りかぶりました！ フォームはキレッキレです！ ジョー選手のアナル目掛けて一直線に突き刺したー！ ストレートに見えたが、これは何だー！？」

「スプリットです」

「おお！ ストレートの勢いそのまま直前で前立腺に落としたー！
最後にとんでもない決め球を出して来ましたー！ さあ、判定はどうだ！？」

ズダーン！

「ああー！ ジョー選手『ダルビッチ』をケツに突き刺したままバスタブに倒れ込んだー！
ヨダレを垂らして白目を剥いています！
昇天です！ 昇天しています！

ゲーーーームセット！！

殻子投手が見事打ち取りましたー！
ここで放送時間一杯となりました！ 皆さんまた来週ー！」

wwwwww

「キャーッ！ ヤッターッ！」

「殻子さんすごーい！」

パブ姉はタンバリンとオモチャのラッパを投げ捨てた。カウンター越しに真宮子とハイタッチとハグを繰り返した。

優勝したかのような騒ぎの横で、人生を終えた表情で含んだ酒を口から垂らし、呆然としているユルコがいた。

「ユルコさん、実に良い勝負でしたね。

普通に楽しんでいれば良かったものを...

ルールはルール。はい、パンティーを脱いで下さい」

騒いだ後に冷やかな表情でユルコに詰め寄る真宮子がいた。

「ハハ、あれは冗談だって。本気にすんなよ。あ、そうだ、パブ姉！

変態に勝ち負けはないんだよね？

だったら今回の話も勝ち負けなんかないよね？」

ユルコは、すがりつくようにパブ姉に救いを求めた。

「そうね。変態に勝ち負けなんかない。

だけど昇天勝負で試合が組まれたのであれば、結果通り殻子の圧勝よ！」

ユルコは無人島に漂着した。

絶望しているユルコの間隙を見て、真宮子は短パンとパンティーを容赦なく一気に引き下ろした。

「あん！ ヤダ！」

普段聞いたことのない女言葉のユルコ。

真宮子は新しい発見に楽しくなり、壁に埋め込まれた手錠に弱々しくなったユルコを両手両足はりつけた。

「失礼しまーす」

真宮子は『白い亀頭』をユルコの『女の壺』に突き刺した。

「ウギャ〜〜〜！」

宇宙の始まりビッグバンのようなユルコの叫び声は、大塚の街に響き渡った...

後日ユルコの漬物『白い亀頭』は、大塚名物キュウリ一本漬け『女の壺』の特別枠で販売された。

プロフィール写真にはユルコの泣き顔が貼られていた。さらに大根という規格外の大きさと泣き顔がストーリー性を感じさせ、マニアにはたまらない漬物となった。ユルコの『白い亀頭』は『女の壺』初の高値、一本一万円で売れたのだった。

店員から売り上げの10%引かれたを9千円を渡されるユルコ。
罰ゲームでやらされた漬物が金になった。

「良いんだか悪いんだか...」

ユルコはフカしたタバコの煙の行方をボンヤリと眺めた...

第6話 『ユルコと米ナス』

時代の流れと共に発展していくものもあれば淘汰されていくものもある。

メディアの先駆けとして戦前から普及したラジオは、緊急時の必需品だったり手軽な娯楽としても広く親しまれる存在だった。

だがそれは一昔前の話。今では多様化する情報ツールの中に埋もれ、化石のようになっていた。ラジオは、どちらかと言えば淘汰されていく側にいた。

ところが、そんなラジオに一筋の光りが差し込める。

『変態が世界を救う』をテーマに細々と放送し続けていたラジオ番組『ロケットパンティーナイト』が今、若者を中心に注目を集めていた。

あびるのジョーとバイブスターのコンプライアンスギリギリの名勝負が話題を呼んだのだった。ラジオが生み出す言葉の想像力が変態にカリスマ性を与え、感動の嵐を巻き起こした。

「変態は自由だー！」

「変態こそ個性だー！」

「変態最高ー！」

賞賛する若者の声。

『ロケットパンティーナイト』はネット上でトレンド入りを果たすと、一躍ブームとなった。番組開始当初は、変態をカミングアウトし、競わせるような番組内容を「見世物小屋じゃねーか」と批判する声が多かったが、ジェンダーレスの考えが広まりつつある今の世の中にはフィットした。変態が変態を呼び、ブラッシュアップしていく姿は、持続可能な変態としてSDGsにも繋がると、もはや変態は地球に優しい存在となっていった...

変態の終着駅『大塚』も今や、変態の聖地として崇められ、駅前のシャッター通りも息を吹き返し、変態ショップが立ち並んでいた。いつしか変態の竹下通りと呼ばれるようになり、連日変態たちで賑わっていた。

ホストクラブ

『HENGENE(ヘンジン)』

錆びついたブリキの看板は取り外され、ピンクのネオン管がやらしい店構えに様変わりしていた。この店も変態ブームの波に乗り、連日満員御礼だった。

No. 1 ホストの『あびるのジョー』は店の中央に置かれたバスタブの中から出られないほど、聖水を浴びまくっていた。

「ちょっと待ってくれ！

ちゃんと体を拭いてからじゃないと誰の聖水か分からなくなってしまうよ！」

さすがのあびるのジョーも連日の忙しさに根を上げた。49 ヘルツの声も擦れ、子宮に響かなくなっていた。

そんな中、新企画を打ち出し、張り切る男がいた。『乳首作家』の返り咲きを夢見てホスト修行をする『松野反甘尾』だった。

「ソーリーさん！

『乳首ダーツ』入りましたー！」

若い新人ホストがテーブル席から叫ぶと、

「あ！ こっちも入りましたー！ 『乳首ダーツ』！」

違うテーブル席からも声が掛かる。

「あいよー！ 順番、順番。

ごめんね、ちょっと呼ばれちゃったから」

接客中の女の子にウィンクをして立ち上がると、松野反は余裕たっぷりに黒シャツを脱ぎ捨てた。上半身裸となつて一際目立つ乳首を囲う乳毛。パーマを当て、クルンとカーンした乳毛はポンデリングのようだった。

ダーツの的としては最高の仕上がりだった。

「ちょっと早く～

今日こそピンドンいくわよ～」

「ハッハッハッ、

慌てないでお嬢様。私の乳首は逃げたりしませんよ」

松野反が考案した『乳首ダーツ』とは、自分の乳首をダーツの的にして、2メートル離れ

た位置から、お客様が見事乳首を射抜ければ、この店では1本50万円の通称『ピンドン』がゲット出来るというゲームだった。

但し、ダーツの矢(一本5万円)を買わなければならなかった。ちなみにダーツの矢の先には安全の為、ゴムのカバーがされている。

「いくわよ～」

ダーツの矢を買った女性は、松野反の乳首を狙って構えた。

「さあ、バッチコーイ！」

的となった松野反は両手を広げて構えた。

「ちょっとー、ポンデリング揺らさないでよー。狙いが定まらないじゃーん！」

「揺らしてませんて！ ただの風ですよ！

かーぜ！

アハンッ！」

言い訳をしている間に乳首を射抜かれた。

「やったー！ 一発よ一発！

♪ピンドン、ピンドン、ピンドンドン～」

浮かれて騒ぐ女性。乳首を押さえて崩れ落ちる松野反。

そこへ若い新人ホストが駆け寄って、松野反を支えた。

「大丈夫ですか！ ソーリーさん！

もう、やめましょうこんなこと！」

「確かに...

皆んな確実に上手くなってる。

このままだと、やればやるほど赤字になってしまうな...」

「違いますよ！

自分の乳首を見て下さい！

とんでもない色してますよ！」

胸を押さえていた手を退ける松野反。するとそこにはドス黒い紫色をした乳首が顔を出した。

安全カバーがされているとはいえ、打ちつける矢の威力は想像を超えていた。連日連夜、ダーツの矢を喰らい続けた乳首はもはや限界を超えていた。

「彼の言う通りだ。

僕たちはもう、限界に来ている」

そっと松野反の肩に手を置いたのは、あびるのジョーだった。

「ジョーさん...

でも今この変態ブームを逃したら、またいつやって来るか...」

「ブームなんかどうだっていい。

今の状態で女性を満足させられるかい？

そんな中途半端なホストクラブなら続ける意味はない」

「ジョーさん...」

ジョーと松野反は、逆らえない現実になく肩を落とした。

ブームという竜巻に飲み込まれ、ホストクラブ『HENGENE(ヘンジン)』は休業を余儀なくされた。華やかに見える表舞台の影で、消えていく華もあるのがブームの恐ろしさだった...

電飾看板がチカチカと消えそうに灯る。

スナック『パブパブ』

変態ブームはどこ吹く風と言わんばかりに、何も変わらず営業を続けていた。

♪カランコロン

店の入口の扉の鈴が鳴った。

まだ営業前の店内に現れたのは、浮かない顔をした真宮子だった。

「おはようございます...」

「あら、何かあったの？ 真宮子」

パブ姉は、お通し用の干し梅を盛り付けていた。真宮子の顔を見ずに聞いた。

「はあ〜」

真宮子は大きな溜め息をついてカウンター席に座った。

「パブ姉さん、私悔しいです」

「どうしたの？ 良かったら聞かせてくれる？」

パブ姉の優しい言葉に涙しそうになりながら、真宮子は話し始めた。

「『女の壺』という漬物屋さんを覚えていますか？」

「あー、覚えているわよ。

女の人のアソコでキュウリを漬けてる漬物屋さんよね？ あはー！ 私知らずに買っちゃったわよ」

「実は私、その店に漬物の生産者として、毎日キュウリを漬けていたのです」

「ええー！？ 毎日？ すごいじゃない、
がんばり屋さんね真宮子は」

「ですが先日、『女の壺』という漬物屋さんは店名はそのままに、イタリア料理店に変わってしまったのです」

「へえ〜

店名はそのままってことは、女の人のアソコでお料理するのかしら？」

「違います。『女の壺』で漬けた色々な野菜を料理に使うのです。

そして漬物屋さんの時は誰でも生産者になれたのですが、イタリア料理店になってからは、店側が選んだ生産者との契約に変わったのです」

「あら、良かったじゃない。

これからは色々な野菜が漬けられて」

「それが…」

「ん？ どうしたの？
かぶれちゃった？」

「違うのです！
私の漬物は酸味が強すぎて料理に合わないと言われ契約を断られたのです！」

真宮子は悔しさを滲ませ、カウンターテーブルを両手で叩いた。
パブ姉はその様子を優しく見守り、酒の入ったショットグラスを、そっと真宮子の前に差し出した。

「テキーラよ。
クイッと飲んで忘れちゃいなさい」

真宮子は言われるがままにショットグラスを一気に飲み干すと、カウンターテーブルに泣き崩れた。

♪カランコロン

店の扉の鈴が鳴った。

そこに現れたのは、ガニ股でヒョコヒョコと歩きづらそうにするユルコだった。

「おいっす」

「何よユルコ、変な歩き方して～」

重苦しい雰囲気壊してくれて少しホッとするパブ姉だった。

「いやー、参ったよー
エッグプラントパルメザン？
今日のおすすめで出したいからって、急に米ナスの漬物頼まれちゃってさー」

「え！？」

パブ姉と真宮子は同時にユルコの顔を見て固まった。

『女の壺』って漬物屋あったでしょ？

あの店が今イタリアンに変わっちゃってさー。そこの料理人が、罰ゲームで出した私の大根の漬物を買って気に入ったらしいんだよね。契約農家？ そんな感じで契約させられてさー。まあ、安定した副業が出来たのはいいけど、さすがに米ナスはキツイわー」

淡々と語るユルコを睨みつける真宮子。

「うわ~~~~ん！」

たまらず泣き出し、店の奥に引っ込んだ。

「ん？ なんだアイツ？」

「いいの、気にしないで。

でもすごいわね、ユルコにそんな才能があったなんて」

「まあ、『怪我の功名』ってやつ？

自分でも信じられないぐらい、やる気になってるんだよね」

「すごく良いことよ。私も応援する。

でもその『女の壺』についてなんだけど、実は…」

そう言ってパブ姉は、改まってユルコを見据えた。意を決したようなその態度にユルコは緊張した。

「え？ 急に何？

怖いんだけどパブ姉！」

「私も『女の壺』で漬物を作ってみようと思ったことがあってね。でもいきなりキュウリって怖いじゃない？ だから干しブドウで試してみたの。

そしたら出てこなくなっちゃったのー！

やだー！ 私の干しブドウどこいっちゃったのー？」

ユルコは吹き出した。

「ちょっと笑わせないでよパブ姉！

米ナス出そうになったわー！

もうー、営業妨害ー！」

二人はひとしきり笑うと、営業前にも関わらず生ビールで乾杯した。

そこへ血相を変えた真宮子が飛び込んで来た。

「パブ姉さん！ 大変です！
今すぐラジオをつけて下さい！」

「え？ え？ どうしたの真宮子？」

「いいから早くつけて下さい！」

真宮子のただならぬ様子に、パブ姉は慌ててラジオをつけた。

wwwwww

「今夜放送予定だった『ロケットパンティーナイト』は、司会の『咲穂竹汁男』の逮捕により、番組を変更させていただきます。

放送内容は、草食動物と肉食動物の交尾による叫び声の違いをお送りします」

wwwwww

「ええー！？」

驚きのあまり、ユルコの米ナスはミサイルのように発射された...

第7話『Xデー』

突然のニュースに、一番衝撃を受けていたのはパプ姉だった。

「汁男が逮捕！？ どういうこと！？」

「詳しい情報が流れるかも知れません。
このままラジオを聞いてみましょう！」

真宮子が言うとパプ姉は頷いた。その横でユルコは、あたふたと飛び出た米ナスを拾い、ラップに包んでいた。

wwwwww

「ワオ、ワオ、ワオー～～ンッ」

「あー、これは肉食動物の交尾ですね」

「違います。これは草食動物の交尾の叫び声です」

「ええー？ 本当？
どう聞いても肉食動物なんだけどな～」

「じゃあ、これはどっちでしょうーか？」

「ッ、ツアー！」

「ツアー？ 何だ何だ？
これ人間じゃないの？」

「ブブー！ 肉食動物です」

「わかるかーい！」

wwwwww

「ちょっと違うわね、真宮子」

欲しい情報じゃなかった。少し苛立つパブ姉だった。

「すみません。携帯の速報で逮捕だけの話を知ったものですから…」

謝る真宮子の肩に手を掛けたのはユルコだった。

「私の携帯、ワンセグ付いてるからテレビのニュース見れるよ」

そう言ってみんなの前に携帯を出した。画面には丁度、ニュース番組が映し出されていた。

wwwwww

「続いてのニュースです。

社会現象にまで発展した変態ブームの裏側で、性犯罪の被害が多発していることから、警視庁は変態テロリスト対策本部を設立しました。変態ブームの火付け役が、性犯罪を正当化させ、日本の治安を著しく悪化させたとして、ラジオ番組『ロケットパンティーマイト』の司会者、咲穂竹汁男を第一級変態テロリストの容疑で逮捕しました。

咲穂竹汁男容疑者は容疑に対して否認している模様です。

続いてはスポーツです。

マスターズ接待ゴルフで優勝した『モッコリーノ・サッスリーノ』が「もうさすれない」と引退を表明しました…」

wwwwww

「変態が治安を悪くした～！？」

冗談じゃないわよ！！」

パブ姉は今まで見たことのない怒りを露わにすると、割烹着を脱ぎ捨て店を飛び出した。

呆気にとられたユルコと真宮子は顔を見合わせた。

「パブ姉、ヤバくね？」

「ヤバスギパブネエポロリアリ

ヤバスギパブネエポロリアリ」

「お前もヤベーわ！」

ユルコは舌打ちをすると真宮子と一緒にパブ姉の後を追った。
だが、パブ姉はタクシーを拾ってどこかへ行ってしまったらしく、あっという間に見失った。

「マジか～
どこに行ったんだ？」

「仕方ないですね。
店に戻ってパブ姉さんの帰りを待ちましょう」

「あ、いけね、
米ナスをシェフに届けるの忘れてた」

ユルコはラップに包んだ米ナスを真宮子に見せた。見る見るうちに悔しさで顔がこわばる真宮子だった。

「先に店に戻ってな。
私は『女の壺』に寄ってから戻るから」

そう言ってユルコは、その場を去っていった。

「ユルスギユルコノユルユルユ
ユルスギユルコノユルユルユ
ユルスギユルコノユルユルユ」

その後ろ姿を呪うように念仏を唱える真宮子だった...

『ロケットパンティーナイト』を放送するラジオ局

『一本放送』

車寄せのある裏口にタクシーが勢いよく乗りつけた。後方のドアがゆっくり開くと、怒りのオーラを纏ったパブ姉が降り立った。
意を決した表情に迷いはなく、一直線にガードマンが立つ入口に向かった。

「許可証を提示願います」

ガードマンの声に、パブ姉は臆することなくデニムのロングスカートをズリ上げ、豪快にパンティーを脱ぎ取った。

そのままパンティーをガードマンの頭に被せた。

「最高にホットな許可証よ。

文句ある？」

「お通り下さい」

ガードマンはパンティーを頭に被ったまま、何事もなくパブ姉をラジオ局内に通した。

「ロケットパンティーナイトの特別ゲストで呼ばれたんだけど、どこに行けばいいかしら？」

パブ姉は通りすがりの局員に聞いた。

「え！ あ！ 2階のAスタジオです！」

若い局員はすぐさま答えると、ペコペコと頭を下げて去っていった。

パブ姉は気合いを入れ直すと、2階のAスタジオに向かった...

wwwwww

「それではさらにクイズは難しくなって参りますけど、大丈夫ですか？」

「大丈夫じゃないですけど頑張ります」

「はい、そうじゃないと困ります。

では、いきますよー！

この叫び声は肉食でしょうか？ それとも草食でしょうか？」

「ワオ、ワオ、ワオ〜〜ンッ」

「これさっきと同じじゃないですか！

あ、わかった！ さっきは草食だったから肉食だ！」

「ブブー！

正解は、アダルトビデオを観て興奮する犬でしたー」

「わかるかーい！」

バターンッ！！

「え？ え？」

「誰？ なんか知らない女性が入って参りましたが、え、ちょっと何ですか！？」

「咲穂竹汁男が逮捕されたって言うのに、こんなアホな放送してんじゃないわよー！」

wwwwww

ブッ！

飲みかけた生ビールを同時に吹いたユルコと真宮子だった。

「パ、パブ姉～！？？」

パブ姉の帰りを、店で酒を飲みながら待っていた二人は、ラジオに突如現れたパブ姉に
ブッ飛んだ。

「パブ姉ラジオ局に乗り込んだ～！？」

「すごいです！ パブ姉さんはやっぱりすごいです！」

この後パブ姉は何を言うのか？ 二人は心を踊らせて待った。

wwwwww

「変態が世界を救うを信じてやってきたのが、このロケットパンティーナイトじゃない
の！？ それを汁男が逮捕されたら知らん顔するなんておかしいじゃない！

性犯罪だろうが、殺人だろうが罪を犯すヤツはみんな同じ！ 相手のことなんか考えちゃ
いないんだよ！ でも本当の変態は、誰も傷つけることなく、讃え合い高めていくもの
だって教えてくれたのがこのロケットパンティーナイトじゃなかったの！？

だけど一番イカれてるのは警察よ！

性犯罪者たちを捕まえられない自分たちの無能さを誤魔化すように、表舞台に立つ汁
男を悪人に仕立て上げ、捕まえることで警察は性犯罪を食い止めたとアピールするな

んて！

これは言われなき完全な冤罪！

直ちに咲穂竹汁男の釈放と謝罪を警視庁に要求します！ それが出来ないのであれば、私たちは戦います！ 変態は悪じゃない！ 世界平和への道しるべなんだと叫びます！

咲穂竹 汁男が釈放されないのであれば、来週の『X デー』

本当に変態が世界を救うと信じている人ならわかるはず。咲穂竹汁男の釈放を求めて桜田門の警視庁前に集合よ！

世界の爆弾をパンティーに変えてしまおう！

ロケットパンティーナイト！」

wwwwww

ユルコと真宮子はパブ姉の言葉に胸が熱くなった。湧き上がる闘争心を誓うように生ビールのジョッキをカチンと鳴らすと、一気に飲み干した...

第8話『桜田門』

『変態テロリストとは一体！？』

『ラジオの生放送に乱入した女性は何者か！？』

『Xデーとはいつなのか？ 桜田門で何が行われるのか！？』

咲穂竹汁男の逮捕によって起きた一連の騒動を各メディアはこぞって報道した。変態に詳しい専門家まで現れ、連日ワイドショーは逮捕劇を巡って討論を繰り返していた。

『『ロケットパンティーナイト』が巻き起こした変態ブームの経済効果は1千億円とも言われてるんですよ！ これでまた変態が地下に潜ってしまったら経済は落ち込み、変態はさらに陰湿化して治安が悪くなる一方じゃないか！ 変態テロリストなどと言っているが警察がやった行為は、国家権力を振りかざした只の魔女狩りだー！』

「いやいや、でも実際、変態ブームが起きてから性犯罪は増えている訳だし、変態じゃない側としては早くこのブームが去って欲しい訳ですよ。そうすると、咲穂竹汁男の逮捕によって少しでも治安が守られれば、警察が変態テロリストを取り締まるという決断は正当な判断！ 経済効果が上がれば犯罪を犯しても良いなどという理屈は、侵略国家と同じ発想じゃないかー！」

「侵略してるのは警察の方でしょうがー！」

ジェンダーレスが叫ばれ、多様性が求められてる今のご時世を無視した変態差別！ 全くもってナンセンスだ！ 経済が発展する、つまりお金が動く裏側には、必ずと言っていいほど反社会組織が絡んでいる。叩くべきはそこでしょうが！ 変態テロリストだなんて、でっち上げた罪だ！ 前代未聞の誤認逮捕だー！」

「専門家のお二人方、一旦ここで視聴者によるアンケートの結果をお知らせします」

ワイドショーの司会者が割って入った。

「咲穂竹汁男の逮捕は正しいと答えた人は8% 間違っていると答えた人は92%
大多数の視聴者が間違っていると答えたようです。アンケート内容を一部紹介します。

『ジャコウネコの糞から出来るコピルアクコーヒー。それを超えるコーヒー豆が完成したと、練馬区の喫茶店店主が「自分の糞はジャコウネコより香ばしい」と豪語』

『墨田区の銭湯が男湯と女湯を仕切る壁をマジックミラーにした所、売り上げが倍増。「新しいデートスポットになれば」と番台で夢を語る店主』

『伝説のパンツロックバンド【スカトロボーイズ】が再結成。ボーカルの魔道バタ男は「ローションたっぷりピッカピカの鏡面仕上げだぜ！」と意気込みを熱弁』

などなど、色んな声が寄せられています。
あっ、とここで中継が繋がったようです。
又野下 寺子アナー！」

司会者が振ると TV 画面は切り替わり、元気な若い女子アナが映った。

「ハイ！ 私は今、警視庁本部庁舎こと『桜田門』の前に来ていまーす。
いつ来るか分からない『X デー』を前に、武装した警官ら『桜田門』の周りを覆い尽くし、現場は物々しい雰囲気になっています。見物客なども多く現れ、携帯で撮影したりと、イベントを待ち侘びてるようにも見えます」

「寺子アナー！ インタビュー出来ますかー？
変態が大集合されると思われる『X デー』はいつなのか、予想を聞いてもらえますかー？」

「あ、ハイ！
それでは一眼レフにパンティーを被せてシャッターチャンスを狙っている男性に聞いてみたいと思います。」

こんにちはー
今こちらで何をされているんですかー？」

「え、あ、別に...」

「ずいぶん本格的なカメラですが、何を撮っているんですかー？」

「な、何だよ、女の警官の後ろ姿を撮っちゃいけない法律なんてあんのかよ！」

「あ、いえ、私はただ...」

うろたえる寺子アナを司会者が、すかさずフォローした。

「寺子アナー！ 次いきましょー！
もうちょい軽めの人にしましょうかー」

「あ、ハイ！ すいません、失礼しました。
それでは向こうから歩いて来る、ちょっとチャラめの男性に聞いてみたいと思います」

こんにちはー
今騒がれている『X デー』ってご存知ですか？」

ピンク色の髪の男はニコニコとカメラ目線で答えた。

「知ってる知ってるー
大塚のママがラジオで言ったヤツっしょ？
俺めっちゃあの店知ってんだよねー
一杯飲むごとにパンティー被らされてさー
会計の時には、被ったパンティーを一枚ずつ数えるんだよ『1枚～2枚～』ってね。運動会の玉入れじゃねーつうんだよ！ でもそれが面白くてさ。そうそう、俺なんかは初心者だから分からないけどプロの人は『変態の母』なんて呼んでたね。『X デー』は俺も楽しみだよ。いつかわかんねーけど」

「なるほど！ ありがとうございます！
現場からは以上でーす！」

「はい、お疲れ様でした寺子アナ。
それではここで一旦 CM です」

司会者が頭を下げると番組はCMに変わった...

ラジオの生放送に乱入し『Xデー』を宣告した女性は誰だ？という話題もTVやネットでスナックパブパブのママ、パブ姉だということが徐々にバレ始めると、マスコミがスナックパブパブに押し寄せた。

だが、ラジオ局乱入からパブ姉は姿を消していた。マスコミの対応に追われるユルコと真宮子だった。

「だーかーらー
いないって言ってるじゃん！」

「『Xデー』はいつなんですか？ 教えて下さい！」

「それも知らないって言ってるじゃん！
しつけーなー
真宮子、こいつら呪ってやれ！」

「ユルスギユルコノユルユルユ
ユルスギユルコノユルユルユ
ユルスギユルコノユルユルユ」

「私呪ってどーすんだよ！
あーもう！ とにかく帰ってよ！」

ユルコはたまたまずスナックパブパブの扉を閉めた。

「ふう〜」

ユルコは溜め息を吐くと、カウンターの中に入り冷蔵庫から瓶ビールを取り出し、栓を開けてそのままラッパ飲みした。

「プハー！ うめ〜
真宮子もいくか？」

「生が良いです」

「チッ、お前が言うとかやらしいんだよ」

そう言いながら生ビールを注いであげるユルコだった。
二人は乾杯し、今夜は営業するかしないかの討論で盛り上がった。すると...

♪カランコロン

また、店の扉の鈴が鳴った。

「はいはい、パブ姉なら居ないよ〜」

「営業時間外なのです」

ユルコと真宮子は扉の方は見ず、あしらうように言った。

「やあ！ 君たち元気そうだね！」

颯爽と夏の潮風のように現れたのは、千忽方穀子だった。スカイブルーの Y シャツの襟を立て、黒のスラックス姿は、宝塚の男役のようだった。

「わー！ 穀子さん！」

真っ先に気付いて近寄って行ったのは真宮子だった。穀子が手に持つ、金色に輝くバイブに目をやった。

「穀子さん、それは？」

「アハ、良かった！

真宮子さんはバイブに興味があると思って、お土産を持って来たよ。

これは『我武者羅』の最新作

『二刀流』だ。

前方のソリ上がったバットののような形状は、快感を量産する理想的なアーチになっていて、後方の飛び出たボールは、アナルに向けて時速 160km を体感出来る...」

「いーいーいー！ それ話し出すと終わらないから！ 何しに来たのさ、穀子さん」

たまらず割って入ったユルコだった。

「あーごめんごめん、ユルコさん。
パブ姉の『Xデー』を応援しに駆けつけたんだ」

「え!？」

ユルコと真宮子は同時に殻子の顔を見た。

「殻子さんは『Xデー』がいつか知ってるの？」

「ええー!? 当たり前じゃないか!

本当の変態は『ロケットパンティーナイト』が生み出したんだ。

変態にとって絶対外せない時間が『Xデー』

それは『ロケットパンティーナイト』の放送時間、水曜日の午後8時だよ!」

ユルコと真宮子は固まった。

『Xデー』は明日だった...

第9話『再会』

『Xデー』が『ロケットパンティナイト』の放送時間ということがSNSの書き込みなどで明らかになると、警視庁本部庁舎ごと『桜田門』の警備はさらに強化された。放水車が配備され建物の周りにはバリケードが張り巡らされた。各TV局も特番を組み、刻一刻と迫る『Xデー』を生中継で放送した。

そんな厳戒態勢の中『桜田門』前には続々と人が集まって来た。すでに桜田通りを埋め尽くす勢이었다...

電飾看板がチカチカと消えそうに灯る。

スナック『パブパブ』

結局、パブ姉は店に戻って来ることはなく『Xデー』を迎えることになった。

ユルコは短パンTシャツに便所サンダルと、いつもと変わらない姿で店の前に立っていた。だが、これから『Xデー』に参加するののかという緊張感からか、セブンスターを両手に一本ずつ交互に吸って貧乏ゆすりをしていた。

そこへ店の中から遅れて出て来たのは真宮子だった。

「遅くなりました。

さあ、参りましょうかユルコさん」

涼しげに言う真宮子の格好は、ロゴの入ったハイレグの水着にハイヒール。パラソルみたいな傘をクルクルと回していた。

「何でバドガールなんだよ！」

ユルコはすかさずツッコむと、緊張している自分が恥ずかしくなった。

「イベントには必要な存在なのです。

もうワンセットあります。

ユルコも一緒にどうですか？」

「バ、バカじゃねーの！

私はハイネケン派なんだよ！」

二人は、あーだこーだ言いながらも『桜田門』に向かった...

「はい！こちら『桜田門』前の寺子でーす！

『Xデー』を目前に本物の変態たちは、大変盛り上がっています。持ち寄った変態グッズを自慢し合ったり、脇の匂いを嗅ぎ合ったりと、厳戒態勢の警官らとは対照的に実に楽しそうです！」

寺子アナも変態たちの勢いに飲まれ、お祭りに参加しているようだった。

「あれ？

飯尾 数子さんじゃないですかー」

『Xデー』の群衆の中から声を掛けて近寄って来た男の黒シャツは、乳首周りがくり抜かれていた。突き出た乳首を囲う乳毛はクルンとカールされ、ポンドリングのようだった。

「げげっ！またあんた！？」

「いや～、何か運命を感じますね～」

「ないない！一切感じない！」

数子は身振り手振りで拒むと、松野反の後ろからフンドシ姿の男が現れた。

あびるのジョーだった。

数子はハッとなり、急に女の顔になった。

「やあ、元気だったかい？」

「あんっ...

ん？あれ？」

以前は、ジョーの声を聞いただけで感じてしまっていたのに、今は何にも感じなかった。

「フッ、バレてしまったか。

そうなんだ、僕の声は潰れてしまい、女の人を喜ばせられなくなってしまったんだ」

「なーんだ、そういうことだったの。

じゃあ『あびるだけのジョー』ね。

それなら何も怖くないわ。

あ、そうだ！

丁度あんたたち乳首出してるから、ちょっと試させて」

そう言って数子は手提げのバッグからガサゴソと何やら探した。

「あ！もしかして数子さんから直接『乳首アート』をして頂けるのですか？

いや～光栄です！好きなだけやって下さい」

松野反は胸を張って乳首を突き出した。

ジョーも渋々、乳首を突き出した。

「フフ、今回のはね、人の温度を感じると発光するっていう塗料を開発したの。

『乳首アート』を手軽に出来るように形をリップクリームにして塗りやすくしました。

じゃあ、いくわよ」

数子は『発光リップクリーム』を松野反の乳首に、そっと優しく塗り付けた。

「あ、ああ～数子さ～ん」

「ちょっと、ジッとしててよ。乳首からズレちゃうでしょ」

「でも、でも、あ、ああ～数子さ～ん」

「はい、一丁上がりー」

松野反の乳首は黄緑色に発光していた。

心臓の鼓動に合わせて、ホワン、ホワンと発光する乳首は、まるでホタルの様だった。

「次は『あびるだけのジョー』

あなたの番よ」

数子は前回、昇天させられた借りがある。お返しが出来ると意気込んだ。『発光リップク

リーム』を竜巻のように回転させ、乳首に当てた。

「つ、つあ〜！」

ジョーは膝をガクガクさせた。

数子はもう片方の乳首には発光リップクリームをこれでもかと連射で押し当てた。

「ハピ、ハピ、ハピヴァースディ〜」

う、産まれた！？

ジョーは膝から崩れ落ち、白目を剥いて倒れた。一瞬で昇天してしまった。

「乳首だけでも昇天させられるのよ。

覚えておいてね『だけのジョー』さん」

数子は発光リップをバッグに収めると、群衆の中へ消えていった。

その姿を見送る松野反の乳首は、群衆の中を彷徨うホタルのようだった。

『Xデー』まで残り30分前となった『桜田門』前は変態たちで埋め尽くされ、この中から誰かを見つけるなど不可能だった。

ところが、一際目立つ存在がいた。

スラっとしたスタイルに上下金色のスーツ。

端正な顔立ちにボーイッシュに決めた髪型は、宝塚の男役の様だった。

肩からバイブを繋げた様な物をぶら下げていた。

「か、殻子さん…」

群衆の雑踏に掻き消されてしまいそうな声で殻子に近付いて来る女の子がいた。

殻子はそれに気付いた。

「あ、奈太良ヶ丘守子ちゃん！

わー久しぶりだね、元気だった？」

「あ、覚えていて下さったんですね。

嬉しいです。か、殻子さんも相変わらず格好いいです。

ああ、緊張して手が震えてきた…」

守子は両手を胸元に寄せ、拳を握り締めた。

無垢な仕草の守子の格好は、スクール水着だった。より一層純粋さが感じられた。

「守子ちゃん、これ見てよ」

殻子はバイブを繋げて一周させた物を肩から下ろして目の前に出した。
うつむいていた守子はそれを見た。

「こ、これは何ですか？」

「バイブのフラフープだよ」

自信満々に言う殻子は笑い声を上げた。

「さあ、さあ、守子ちゃん、やってみて。
新しい快感が得られるよ」

殻子はそう言ってバイブの電源を全部 ON にすると、ウネウネ動きだすフラフープを守子に手渡した。

守子はゴクッと生唾を飲み込むと、言われるがままにフラフープを体に通した、
フラフープを勢いよく回すと両手を上げ、腰も回転させた。
バイブのフラフープは胸から腰までを行ったり来たり、ウネウネと奇妙な動きで回転した。

「あっ、あっ、あっ、ああ～～」

今まで味わったことのない快感に守子は意識が遠のき倒れそうになった。すると、すかさず殻子は手を差し伸べた。引き寄せて胸元に守子を抱き寄せた。

「新しい景色は見えたかい？」

「はい、綺麗な星が見えました…」

守子はそう言い残し、意識をなくした。

「守子ー！」

力なく倒れる守子を力強く抱きしめる姿は、宝塚のクライマックスシーンのような
った…

最終話 『変態の母』

「ひえ～
スゲー人じゃーん！
これ全部変態なわけー？」

地下鉄の『桜田門』駅から地上に出ると、警視庁本部庁舎前は、変態で埋め尽くされていた。

「この中からパブ姉探せるか～？
て、何やってんだよ！ 真宮子」

ユルコが振り返ると、バドガール真宮子が笑顔で『女の壺キュウリ』を配っていた。

「そんなことやってる場合じゃないだろ！」

「酸っぱいのが好きな人もいます！
たまたまシェフには合わなかっただけなのです！」

「はぁ？ 何言ってんだよ？
いいからパブ姉探すぞ」

ユルコは真宮子の手を取って、群衆の中に入っていった...

「ハーイ！ テラッテラの寺子でーす！」

すっかり変態色に染まってきたリポーターの寺子アナはノリノリで中継を続けた。

「さあ、『X デー』カウントダウンまで1分を切りましたー！ すでにお祭り状態の『桜田門』前で一体何が起こるのでしょうか？
分からなすぎて、寺子テラっちゃう！
さあ、そんなことを言っている間に10秒前です。変態たちの大合唱が始まりましたー！」

「5ー！」

「4ー！」

「3ー！」

「2ー！」

「1ー！」

ドーンッ！ ドドーンッ！ ドドーンッ！

「キャー！ 花火！？

大砲のようなスゴイ音がしましたー！

あれ？ 夜空を見上げてても花火は上がりません！ 今の音は一体何だったのでしょうか？

あ、あー！ 空から何か降って来ましたー！

紙吹雪です！

あ、違います！ レインボーカラーのパンティーです！ もの凄い数です！」

「ウオオオォー！！」

変態たちは舞い降りるパンティーに雄叫びを上げた。

「突如、空に打ち上げられたパンティーは、変態たちへのギフトのようです！」

変態たちはパンティーを掴み取ると、被る者、振り回す者、まさに水を得た魚だった。

♪ドットアンドドタン、ドドタドットタン

そこへ大音量の音楽を流したトレーラーが突っ込んで来た。

ザザザザーー！！

急ブレーキをかけ、豪快にスライドさせると、変態たちの手前で止まった。

「なんとトレーラーが突っ込んで来ましたー！ 大音量の音楽を流しています！」

何なんでしょう、このトレーラーは！？

あれ？ 変態たちは誰も警戒していません。それどころか、音楽を聞いてノっきます！
どういう事か、ちょっと聞いてみたいと思います！

すいませーん！ この曲は皆さんご存知なんですか？」

「当たり前だよ！ この曲は、
伝説のパンツロックバンド『スカトロボーイズ』のベストナンバー【クソの花】だよ！」

「あー！ 再結成したとニュースになっていたあのバンドですね？
変態たちにとって『スカトロボーイズ』はカリスマ的存在のようです！
あ、あー！ トレーラーのコンテナが、ゆっくりと上に開いていきます！
音量はさらに大きく、バンドのメンバーらしき足元が見えてきましたー！」

「ワァァァー！！」

変態たちは大歓声を上げた。
コンテナが開き切ると歓声は鳴り止んだ。

「？」

中央のボーカルが立つ位置には、魔道バタ男ではなく、デニムのロングスカートに上半身裸のパブ姉が立っていた。胸にはピンク色の星形のニプレスが4つ綺麗に並んでいた。

「ああー！ あれは JIS が認めた最高品質！
『フォースターニプレス』です！
バズーカーを抱えています！ あの女性は一体誰なんでしょうカー！？」

静まり返った群衆を前にパブ姉は、堂々とマイクを握った。

「変態差別は決して許さない！
例え相手が警察であったとしても同じこと！
私たちのやり方を教えてやるわ！
変態が世界を救う！
ロケットパンティーナイト！！」

叫び終わると、バズーカー砲を夜空に向けた。

ドドーンッ！

発射されたのは弾丸ではなく、レインボーカラーのパンティーだった。
変態たちは、再び大歓声を上げた。
タイミングを見て、コンテナの脇から出て来たのは魔道 バタ男だった。
それに気づき、パブ姉は振り向いた。

「ありがとねバタ男ちゃん。
後はよろしく」

「ああ、任せとけ波舞子。
この日の為に再結成したんだからよ」

パブ姉はコックリ頷くと、

「いくわよー！！」

コンテナから飛び降り、群衆の中へ入っていった。その姿を見送り、バタ男はマイクを
掴んだ。

「お前らー気合い入れていくぞー！
【クソの花】 ーーー！！

♪ジャララーラララー

野グソに水をあげましょう～
心の声もかけましょう～
キレイに咲いたよクソの花～
花言葉は『我慢しない』～

トイレなんかでするものか～
トイレなんかクソったれ～
オーイエ～」

魔道バタ男の歌声は、変態たちを奮い立たせた。

「いたいたいた！ パブ姉いたよ！
すげー！ 警察の方に向かってるぞ！」

パブ姉のド派手な登場に興奮するユルコと真宮子だった。

「私たちも続くのです！」

真宮子はパラソルとキュウリを投げ捨てた。

「よっしゃー！ 待ってろパブ姉ー！」

ユルコと真宮子は群衆を掻き分けながらパブ姉の背中を追いかけた。

「たった今情報が入りました！『フォースターニプレス』の女性の正体分かりました！大塚のスナックのママ『変態の母』です！『Xデー』をラジオで宣告し、ここまで変態を集めた人物です！

たった今、先頭に立ち、警官らと向き合いましたー！目が離せない緊張の場面です！」

パブ姉は先頭に立つ警官を睨みつけると、何やら話し掛けた。

「あなたは何を守ってるの？

国？ 平和？ 家族？ 守るのと取り締まるのでは話は別よ。それが分からないなら、やめてしまいなさい。

変態なら答えはひとつよ！」

そう言ってパブ姉は、デニムのロングスカートをズリ上げパンティーを脱ぎ取ると、警官の帽子を払い、頭にパンティーを被せた。

「ワァァァー！！」

それを見た変態たちは大歓声を上げた。

警官はパンティーを被ったまま、落ちてるパンティーを拾い、パブ姉の頭にも被せた。

「ウワァァァー！！」

歓喜にも似た歓声が巻き起こった。

パンティーを被ったまま、パブ姉と警官は睨み合うと、二人とも吹き出して笑った。

その瞬間、境界線は無くなった。

ドーンッ！ ドドーンッ！

打ち上がるロケットパンティー
夜空に舞い上がるレインボーパンティー
武装していた警官らは武器を投げ捨てた。
降り注ぐパンティーに救いを求めるように変態たちの群れへと同化していった。
本能が欲するままにパンティーで戯れた。
スカトロボーイズの曲がさらにヒートアップすると、一斉にパンティーを振り回した。
一般市民も警察も性別も関係ない。そこにあるのは変態という平等。争いのない桃源郷
のような景色が広がっていた。

「私は今、信じられない光景を目の当たりにしています！ 警察が武器を捨て、パンティー
を振り回しています！ クルクルと回すパンティーは、お花のようです！ 『変態の母』が
育てたレインボーパンティーの、お花畑は今、満開です！ こんな光景は二度と見るこ
とは出来ないでしょう！ この新たな歴史の1ページに立ち会えたことを私は、私は...」

寺子アナは感動で声を詰まらせた。

「寺子アナー！ 立派な中継ありがとうございましたー！
咲穂竹汁男逮捕劇から始まった『Xデー』は予想だにしない展開となりました。
ここで番組独自で行った咲穂竹汁男の釈放を求めた署名運動が1千万票を超えました！
票の数はまだまだ増え続けています。これは国民の声として当番組『モンデーナイト』が
責任を持って警視庁に届けます！
今後それがどのように影響するのか、厳しい目で見届けて行きたいと思います。
それではまた明日」

歴史的一夜となった、
Xデー『ロケットパンティーナイト』
『変態という平等』はTVを通じて、全国民に衝撃と感動を与えた。
そして明日、咲穂竹汁男の10日間拘留が終わる。そこでどのような判決が下され、警視
庁はどのように対応するのか、世間の注目は続いた...

電球が消えたままの電飾看板。
一夜明けた昼下がりの、

スナック『パブパブ』

酔い潰れた変態たちが、カウンター席や床に死体のように横たわっていた。

「う、う～ん…」

床で寝ていたユルコは、知らない変態の足を退けて、フラフラと立ち上がった。

「あつたま痛え～」

昨夜の『Xデー』の後、そのままの勢いで『パブパブ』に流れ、誰それ構わず飲み明かしたのだった。

ユルコは喉が渇き、水を飲もうとカウンターの奥に回った、すると、同じく酔い潰れたパブ姉が仰向けで倒れていた。

『フォースターニプレス』は剥がれ落ち、星は一つだけになっていた。

「あははー

パブ姉、品質落ちてますよ～」

ユルコは水道の蛇口を捻ると、流れる水をそのままガブガブ飲んだ。

「プハー」

一息つくと、携帯をポケットから取り出して時間を見た。

「うわっ、マジか！」

ユルコは慌てて、寝ているパブ姉を叩き起こした。

「咲穂竹 汁男釈放だって！！

今TVでやってるよ！」

ユルコは携帯のワンセグを見せた。

「咲穂竹汁男氏釈放です！

『変態という平等』が認められました！

そして最終的には3千万票まで集まった署名が、国民の声が、警察という国家権力に勝ちましたー！」

パブ姉は一気に目が覚めた。

「え？ うそ！？ やった、やった、ヤッターー！！」

両手を突き上げ立ち上がった。
その瞬間、最後の星も剥がれ落ちた。

「真宮子も起きろ！
咲穂竹 汁男釈放だぞー！」

ユルコはカウンター席で眠る真宮子の肩を揺らした。

「ピクルスとして使って頂けたら…」

「ダメだ、変な夢見てる」

ユルコは諦め、パブ姉とニュースの続きを見た。

「たった今、警視庁本部庁舎から、ゆっくりと姿を現した咲穂竹 汁男氏です。
我々マスコミに対して、深々とお辞儀をしています。
おや？
お辞儀をしたまま何やらモゾモゾしています。どうしたのでしょうか？
あ、あー！ 脱いでいます！ お辞儀をしたまま服を脱ぎ始めましたー！」

「え？」

ユルコとパブ姉は目を見合わせた。

「あっという間にパンツ一丁です！
そして最後のパンツにも今、手を掛けています！
あー！ 脱いだー！！
これはいけません！
生放送で公然わいせつ罪です！ すぐさま警察官に取り押さえられています！
まさかの事態です！
咲穂竹 汁男、再逮捕です！！」

ユルコとパブ姉は、そのまま固まってしまった…

咲穂竹汁男の再逮捕により、ラジオ番組『ロケットパンティーナイト』は長年の歴史に終止符を打った。

そして変態ブームも後を追うように、下火となり消えていった。

だが、変態の間では『ロケットパンティーナイト』はラジオの番組名ではなく『変態の母』ことパブ姉が巻き起こした、

Xデー『ロケットパンティーナイト』が、伝説の一夜として語り継がれていったのであった。

そしてパブ姉の功績は、変態界で高く評価され、変態の聖地『大塚』駅前に、パブ姉のブロンズ像が建てられた。

『変態の母』と記されたブロンズ像は、レインボーパンティーを天に掲げ、争いをなくす為に戦い、変態を貫いたパブ姉の勇ましい姿だった。

そして今日も、光り輝く『フォースターニプレス』は、大塚の街を優しく照らすのであった...

ロケットパンティーナイト

監 修 自称シルマン

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
